

315280

12/18

物靈 語界

海洋萬里

西之卷

宗教
129

瑞月口述



始



函 宗教
Ⅲ
號 129
永久保存

西口端々口練

〔續博物志第三十四卷〕

絲洋萬里人

天壽八社發天



1083039



序

八月廿九日、伊豆國湯ヶ島温泉にて第三十三卷の口述を終りてより、口述者の誕生祝の神劇の監督を初め、家屋の建替や建直しの相談等に色々手間取りしたため、本巻の口述も思ふ様に行かず、漸く本月七日龜岡瑞祥閣に出張し、四五日休養の上、彌十
 二日より十四日まで三日間にて神助の下に編成を告げました。筆録者は松村眞澄、北
 村隆光、加藤明子の三人、残暑を忍び乍ら四人は机に相對して、筑紫の島即ち亞弗利
 加國へ三五教の黒姫が三人の從者と共に渡り、奇妙な運命を辿るといふ靈界の因縁物
 語を大略識した面白きものであります。

大正十一年九月十四日(午後五時)

序

口述者識

一

心なき人の言葉を聞く毎に

曇りたる世を猶思ふかな

千早振る神の恵みはもろこしの

千里の外も守りたまひぬ

身はたこへ萬里の外におくとも

瑞の御魂は世人守らむ

海洋萬里「酉の巻」目次

序	文	頁
總	説	一

第一篇 筑紫の不知火

第一章	筑紫上陸	三
第二章	甍孫	一八
第三章	障文句	三四
第四章	歌垣	五〇
第五章	對歌	七二
第六章	蜂の巢	九六
目次		一

第七章 無花果……………一〇

第八章 暴風雨……………一六

第二篇 有情無情

第九章 玉の黒點……………一四一

第一〇章 空縁……………一五六

第十一章 富士咲……………一七四

第十二章 漆山……………一九〇

第十三章 行進歌……………二〇八

第十四章 落胆……………二二六

第十五章 手長猿……………二四二

第十六章 樂天主義……………二五七

第三篇 峠の達引

第十七章 向日峠……………二六七

第十八章 三人塚……………二八二

第十九章 生命の親……………二九九

第二〇章 玉卜……………三一五

第二十一章 神護……………三三二

第二十二章 蛙の口……………三四四

第二十三章 勅静……………三五八

海洋萬里(西の卷)目次

東京府立第一高等女子学校

第一号
第二号
第三号
第四号
第五号
第六号
第七号
第八号
第九号
第十号

(口繪説明)

震災前東都上空ニケ所に顯はれたる綿雲の二つ

海洋萬里【西の巻】 [34]

口述者 出 口 瑞 月

筆録者 松 村 真 澄

加 北 村 隆 光
藤 明 子

總 說

本卷は三五教の宣傳使黒姫と云ふ勇健なる婦人が孫公、房公、芳公の三人の從者を引連れ、凝能恭呂島の聖地を立出で、日本海から太平洋に出で、一年有餘の日子を費やして亞弗利加の建日の港に安着し、それより小島別命の舊蹟なる岩窟に立寄り、

高山峠を越へ、建日の館に立寄りて新教主に面會し、次に向日峠の麓の森林に於て、三人の男女の生命を救ひ、火の國の神館に進み行く、面白き趣味深き修養的物語であります。文中樂天主義の眞隨が極めて簡明に説いてあります。惟神靈幸倍坐世

大正十一年九月十四日

於瑞祥閣

口 述 者 識

高 山 峠 一 日 記

第一章 筑紫の不知火 (二六八)

第一章 筑紫上陸 (九四三)

黄金の玉の所在をば

搜して四方を彷徨ひし

三五教の黒姫は

玉に對する執着を

漸く拂ひ自轉倒の

神の御國の中心地

綾の聖地に立歸り

暫く我家に潜みつゝ

麻邇の寶珠の間違ひに

二世を契し我夫の

高山彦と衝突し

離縁騒ぎが持上がり

高山彦は聖地より

筑紫の島へ行かんとして

執念深く附きまどふ

妻黒姫を振棄てゝ

筑紫上陸

ドロンと姿を隠しける

黒姫今は矢も楯も

玉の搜索第二とし

皺苦茶だらけの中婆が

萬里の波濤を打渡り

命の限り筑紫洞

海の底迄探らん

伴に従へ由良の海

日本海をかけ離れ

龍宮島の沖を越へ

戀しき夫に捨てられし

堪らぬ様になり果て

夫の所在を探らん

心猿意馬に煩られて

心を盡し身を盡し

行方は確に不知火の

孫、房、芳の三人を

眞帆を孕んで漕ぎ出す

太平洋を横切りて

印度の洋を右に見て

筑紫の島の東岸に

漸く渡り着きにけり。

茲は建日の港と言ひ、其昔日の出神、面那藝神、祝姫神の宣傳使が上陸された由緒深き港である。

黒姫は三人の従者と共に麻邇の玉の所在や、黄金の玉の所在を搜索すると云ふは、只單に表面の理由であつて、其實玉に對しては、既に執着心を殆ど脱却してゐたのである。只高山彦に衆人環視の前にて夫婦の縁を切られ、其恥を雪がんとする一念で、高山彦に對する未練とが一つになりて、心猿意馬は忽ち頭を掻け、此老驕を驅つて、結構な聖地を後に再び、斯かる野蠻國へ連れて來られたのである。黒姫は高山彦が假令大蛇に還元せうが、鬼にならうが、又は石の唐櫃に隠れて居らうが、女の意地、せうしても一度面會して、心に堆く積れる鬱憤の塵を晴らし、都合好くば、再舊交

を温め、夫婦となり、手に手を取つて聖地に歸り、高姫其他の面々に、自分の意地は此通りと見せてやらねば、今迄盡して来た盡力が無になる。自分の面目玉は丸潰れである……と妙な所へ脱線して、戀と云ふ惡魔に取りひしがれ、殆ど半狂亂の如く、目は釣上り、頬は瘦こけ、顔色青ざめ、實に物凄しい面相になつて居た。

孫、房、芳の三人は、黒姫に色々甘言を以て操られ、ここ迄従いては来たもの、別に宣傳の目的もなければ、何の楽しみもない、只一日も早く高山彦の所在を尋ねて、黒姫と共に自轉倒島へ歸りたいのが胸一杯であつた。黒姫も亦官傳使の身であり乍ら高山彦の搜索に心魂を奪はれ、只一日も早く夫に會はさせ玉へと、朝夕祈願するのみで、道を宣傳すると云ふ其使命は殆ど忘却してゐた。老婆の戀に狂うた位、始末に了へぬものはない。黒姫が此建日の港に着く迄には、幾度となくあちらの島へ寄り、此方

の島へ寄り、厳しい搜索をやつて居た爲、餘程日子を費やしてゐる。殆ど一年許り掛つた。

そうして船は二三回難破し、便宜の方法にて舟を買つたり、拾つたりし乍ら、漸くここへ辿り着いたのである。其間には随分脊中に腹の替へられないやうな憂目に遭ひ天則違反的行動をも続け、島に繋ぎありし、何人かの舟をソツと失敬して、乗つて来た事もあるのであつた。

三人の従者は黒姫に隨從して却て宣傳使としての數多の黒姫の矛盾を目撃してゐるので、聖地を出た時の黒姫に對する信用と、今の黒姫に對する態度とは、ガラツと變つてゐる。黒姫は要するに口許りの人間で、行ひの伴はざる執念深き懸垂れ婆アと云ふ觀念が、三人の胸に期せずして兆してゐる。それ故日を逐うて、黒姫を輕蔑し、今

は容易に黒姫の命令に服しない様になつて居る。のみならず却て事に觸れ、物に接し
からかつて見ては、黒姫が喜怒哀樂、愛惡慾の面部の色に現はるゝを見て、せめても
の旅の慰みとしてゐた位である。併し乍ら乗り掛けた舟、途中に引返す譯にも行かず
、幾分か神様の教が三人共腹に浸み渡つてゐるお蔭で、太平洋の真ん中へ出た時分か
ら、三人はヒソ／＼と囁き合ひ、一層の事黒姫を海の中へ放り込んで、素知らぬ顔で
自轉倒島へ歸らうかと迄、孫公が發起で相談した事もあつた。されどそんな無茶な事
をすれば、忽ち天則違反の大罪を重ね、如何なる嚴罰に神界から處せらるゝやも計り
難しと、直日の魂の閃きに見直し宣ひ直し、厭々乍ら、萬里の波濤を艱難辛苦してこ
こ迄従いて來たのである。

黒姫一行は舟を乗りすて、建日の港に上陸し、激潭飛沫の溪流を溯り、四方の風

景を眺め乍ら、草を分けて細き谷道を登つて行く。比較的人通りが多いと見わた、羊
腸の小路が九十九折に白く光つて居る。

孫公「黒姫さんのお蔭で、思はぬ絶景を見せて貰ひました。際限もなき海原を日に照り
つけられ、汐風に晒らされ、雨に當てられ、丸で遊紙さんの様になつて了つた。黒
姫さんは元から鳥の様な黒い御方だから、餘り目立たんが、俺達は自轉倒島へ歸つ
て、宅のお安に此面を見せようものなら、せれ丈悔むであらう。それを思へば残念
で堪らぬワイ。是と云ふも、元を糺せば黒姫さんが、餘りハズバンドに魂を抜かれ
て居るものだから、こんな結果になつて了つたのだ……なア芳公、房公、お前の顔
も随分黒くなつたよ。貴様とこのお瀧や、鏡が、さぞ悔む事だらう。今から思ひや
られて、可哀相なワイ」

芳公「ナアニ、俺ン所のお瀧も房公ン所のお鐵も、元より覺悟して居る筈だ。お瀧の奴俺の出る時に、名殘惜そうに、俺の脊中をポンと叩きやがつて……コレ、この人の、お前さんは黒姫さまのお伴に行くのだから、顔の色迄黒姫さんの感化を受けて來なあきませぬぞね。心の中迄黒うなつて來なさいと吐きやがつた。けれど俺は心の中丈は眞平御孫だ。アハ、ハ、ハ、」

孫公「心の中迄貴様の嫌が、黒姫さんのやうに黒くなつて來いと云ふたのは、一つの謎だよ。貴様は何時も著まめな奴だから、朝から晩迄お瀧と二人が、犬も喰はぬ格氣喧嘩許りやつて、生疵の絶間なし、近所合壁に迷惑をかけた代物だ。それだから黒姫さんが高山彦を慕う様に、此お瀧に一心になれ、そうしてお瀧の爲には假令千里萬里の山坂を越へても、敢て厭はぬと云ふ熱心な情の深い男になつて來なさい、黒

姫さんの貞節を學んで、それを妾にソツクリ其儘行つて呉れ……と云ふ虫の好い謎だ。貴様の嫌アも中々行手だ。餘程貴様とは智慧が優れて居るワイ。アハ、ハ、ハ、」

芳公「俺やモウそんな事を聞くと、女房が戀しうなつて來た。翼でもあれば、此儘羽つて歸りたいのだがなア」

孫公「何と云つても斯うなりや、モウ仕方がない。黒姫泥坊の乾兒になつたやうなものだから、毒を喰はゞ皿まで舐れだ。兎も角高山彦のハズバンドに出あうて、ヤイノくの亂痴氣騒ぎを一幕か二幕見せて貰ひ、其後には我々が居中調停の勞を執り、夫婦が機會均等主義を發揮して、目出たく自轉倒島へ凱旋遊ばす迄は、離れる事は出來ない因縁がまつてゐるのだ。今ヤツと建日の港へ着いた許りだ。今頃には望郷の念に驅られては駄目だぞ。自轉倒島の間は何時も望郷心が強いから、大事業

は到底成功出来ないのだ。斯うなつた以上は、嬬の一人や二人何うでも好いちやないか。都合が好ければ此筑紫島に永住して大事業を起し、一生自轉倒島へは歸らないと云ふ決心が肝腎だ」

芳公「お前は女房のお安を、始めから嫌つて居るのだから、自轉倒島に未練はなからう俺はあれ丈親切な、惚切つた女房が、膝坊主を抱いて、俺の歸るのを、今かくと神様に願かけて待つてるのだから、そんな無情な事は出来ない。一日も早く歸つて女房の喜ぶ顔を見るのが俺の唯一の樂みだ。世の中に夫婦位大切なものはない。何程こんな所で成功をしたと云つても、女房子と一生あはれぬやうな所で、何が面白い」

孫公「アハ、、、毎日日あれ丈憎相に云うて喧嘩をし乍ら、矢張あんなやん茶嬬が戀しいのか。戀といふものは分らぬものだなア」

房公「ソリヤ其等だ。黒姫さんでさへも、云ふと濟まぬが、夕日の影干しのやうな無恰好な禿ちやん頭の爺を、こんな所迄はるく尋ねて来やつしやるのなもの、夫が女房を慕うのは當前だ。俺ン所のお鐵でもそれはく親切なものだよ。孫公ン所のお安は、餘り親切にないのは、つまり孫公が悪いのだ。女と云ふものは、男の方から親切に真心を以て可愛がつてやれば、さうでもなるものだ。貴様の様に、女房を家の道具だとか、器械だとか、産兒機だとか云つて、虐待するやうな事では、目つちの女房だつて、夫を親身になつて思つては呉れないよ。チツと黒姫さんに倣つて、お前も女房を大切にしたら如何だい。こんな遠方迄来た土産として、女房に對する親切を益々濃厚に持ち直して歸るが、何よりの女房への土産だよ……なア黒姫

さん……」

と舌をニュツと出し、顧をつき出して、稍嘲弄的に目を注ぐ。黒姫は始めて口を開き
黒姫「お前さん達三人は自轉倒島を出た時は、随分誠實な熱心な信者であつた。それが
如何したのか、一日くど誠がうすらぎ、遂には妾に迄、輕侮の目を以て見るよ
うになつたぢやないか。何の爲にお前さんは遙々と修業に出て來たのだい。これか
ら先は建日別命が昔脂を取られた筑紫峠の谷會の岩窟があるから、今の中に心を
直しておかぬと、昔の小島別のやうに脂をとられて、へトくになりますぞね。今
の中に改心をしなされ」

孫公「アハ、黒姫さん、改心する人は我々三人許りですか？ まだ外に一人、第一
に改心をせなくてはならぬ連々んつがある事をお忘れになりましたか？」

黒姫「改心し切つた者が、何うして改心する餘地がありませんか。お前さんは此黒姫の
行ひを見なさつたら、大抵分るだらう」

孫公「惟神だ、天の與へだ……と云つて、人の舟を駄つてチヨロまかし、それに乗つ
て來るのが誠ですか。あんな事が、改心し切つた人の行ひとすれば、我々よりも泥
坊の方が餘程改心しとるぢやありませんか」

黒姫「エ、ツベコベと小理窟を言ひなさんな。途中に船が破れて、進退これ谷まつた
時に、主のない船がそこへ流れて來たのは、所謂天の與へだよ。謔にも天の與へ
るを取らざれば、災却て身に及ぶと云ふ事があるぢやないか。神は人間になくて
ならぬものを與へ給ふと云ふ聖者の教がある。船一艘が大切か、我々四人の生命が
大切か、能く事の輕重大小を考へて御覽なさい。機に臨み變に應ずるは、即ち惟神

の大道だよ。こんな事が分らぬ様な事で、能うお前さんも、三五枚の信者ぢや、宣傳使の卵ぢやと云つて、こんな所迄從いて來ましたな、オアホ、、、」

孫公「呆れて物が言へませぬワイ。併し乍ら、お前さんが夫の爲には大切な神務も忘れ宣傳を次にし、あれ程氣違のやうになつて居つた黄金の玉の事をケロリと忘れて、大勢の前で肱鐵砲をかましてくれた高山彦さんを慕ふ其貞節には實に感心だ。大に學ぶべき點がオオアリ大根だ。アハ、、、オホ、、、ウツフ、、、エヘ、、、イヒ、、、」

黒姫「コレ孫公さん、お前さんは此年老りを嘲弄するのかい」

孫公「岩屋の神さんがソロ／＼孫公さんに憑つて、言靈を始めかけたのだよ。ウフ、、、」

と笑ひこける。途端に路傍の尖つた石に腰を打つけ「アイタ、」と云つたぎり、眞青な色になり、顔をしかめ、目を塞いで、人事不省になつて了つた。

(大正一一、九、一二、舊七、二二、松村眞澄録)

瑞 月

もろこしの榮止奈の山に立ちのほる

煙のすがた見るぞ畏こき

ひまらやの峯に輝く月かげは

次第／＼に雲にかくる」

第二章 孫

甦 (九四三)

孫公は、笑ひ轉けた途端に腰背を岩角に強か打ち「ウン」と云つたきり人事不省になつて了つた。房公、芳公の兩人は周章狼狽き、谷水を汲み來つて顔にぶつかけたり、口を無理にあけて水を飲ませなごして種々に介抱を餘念なく續けて居る。されど孫公は、だん／＼身体が冷却する許り、呼べど叫べど何の應答も無くなつて了つた。黒姫は冷然として孫公の倒れた體を斜眼に見て居る。

房公「これ黒姫さん、孫公がこんな目に遇つて居るのです。なぜ神様に願つて下さらぬのか。早く數歌を歌ひ上げて魂返しをして下さい。愚圖々々して居ると、此方の者にはなりませんぞや」

黒姫はニヤリと笑ひ

黒姫「神様の戒めは、恐ろしいものですな。皆様是を見て改心なさい。長上を敬へど云ふ……お前さんは天の御規則を何と心得て御座る。太平洋を渡る時から、此孫公は黒姫の云ふ事を一つ／＼口答へを致し、長上を侮辱した天則違反の罪が自然に報ふて來たのだから、何程頼んだとて祈つたとして、もはや駄目だよ。……これ房さん、芳さん、お前さんも随分孫公のやうに此黒姫に口答へをしたり、又悪口を云つたであらう。第二の候補者はごちらになるか知らんでなア、オホ、……エ、氣味のよい事だ。こんな事が無ければ阿呆らしくて神様の信仰は出來はしない。神が表に現はれて、善と惡とを立て別けると云ふ三五教の宣傳歌は、決して嘘ぢやありませんまいがな。神は善を賞し惡を亡ぼしたまふと云ふ事は、いつも此黒姫の口が酢つば

くなるまで教へてあるぢやないか。それだから神様は怖いと云ふのだ。あ、惟神靈幸倍坐世」

房公「それでも黒姫さん、あんまり冷酷ぢやありませんか。神様は神様として、若し此孫公が高山彦さんであつたら、黒姫さん、お前さんはそんなに平氣な顔がして居られますか？」

黒姫「高山彦さんに限つて、こんな分らぬ天則違反の行ひはなさりませぬ哩。滅多に氣遣ひないから御心配下さいますな、ウフ、、、」

芳公「オイ房公、黒姫には曲津神が憑依したと見ゆる。さうでなくては肝腎の弟子が絆切れて居るのに、如何に無情冷酷な人間でもこんな態度を装ふ譯には行くまい。これから兩人が兩方から鎮魂責にして、黒姫の悪靈を放り出さうぢやないか」

房公「俺は孫公の介抱をする。まだ少し温みがあるから蘇生るかも知れない。お前は黒姫の曲津退治にかゝつて呉れ」

と云ひながら、房公は孫公の倒れた體に向つて一生懸命に鎮魂をなし、天の數歌を謡ひ出した。芳公は兩手を組み黒姫に向つて「ウン〜」と靈を送つて居る。

黒姫「オホ、、、敵は本能寺にあり、我敵は我心に潜むと云つて、此黒姫が悪に見ゆるのは所謂お前の心に悪魔が住んで居るのだよ。そんな馬鹿な蕪當をするよりも早く神様にお詫をなさい。この黒姫の腹立の直らぬかぎりは、房公だつてお前だつて孫公の通りだよ。さても〜憐れなものだなア。心からの發根の改心でないで、何程神様を祈つたとしてあきませぬぞね。これから何事も神第一、黒姫第二とするのだよ」

芳公「高山彦さんと元の通り御夫婦になられた時はどうなります。高山彦第三ですか、或は第二ですか、それを聞かして頂かんと都合が悪いですからなア」

黒姫「今からそんな事を云ふ時ぢやありません。孫公がああ通り冷たくなつて居るのに、お前さんは何とも無いのかい」

芳公「さうですなア、黒姫さんが高山彦さんを思ふ位なものでせうかい。高山彦さんが第二ですか、第三ですか、但は機會均等主義ですか？」

黒姫はニヤリと笑ひ、

黒姫「極つた事よ。私のハズバンドだもの、オホ、、、」

と顔を隠す。五十の坂を越わた皺苦茶婆も、ハズバンドの事を云はれると少しく耻かしくなつたと見える。

今迄打倒れて居た孫公は、房公の看病が利いたのか、但は御神力で息を吹き返したのか、俄に雷のやうな唸り聲を立て出した。黒姫は眞蒼な顔になつて其場にしががんで了ふ。房公、芳公の兩人は且つ驚き且つ喜び、雑早の茂る道端を右に左に周章へ廻る。孫公は益々唸り出した。さうしてツと自ら起き上り、道端の青草の上に胡座をかき眞赤な顔をしながら、への字に結んだ口を片つ方の方から少しづつ、通草がはじけかゝつたやうに上下の唇を開き初め、白い歯を一枚二枚三枚と露はし初めた。三人は目も放たず驚異の念にかけられて孫公の口邊ばかりを見詰めて居ると、孫公の口は三十二枚の齒迄露出して了つて、暫くすると慕蛙が蚊を吸ふ調子で、上下の唇をバクバクと動かした。機みに上下の齒がカッン／＼と打あふ音が聞えて来た。黒姫はツと傍に寄つて、

黒姫「コレ孫公さん、喜びなさい。黒姫の鎮魂のお蔭で、死んで居たお前さんが甦つたのだよ。これからは黒姫に對しては、今迄のやうな傲慢の態度をあらためなさいや」

房公「これ黒姫さん、鎮魂したのは私ですよ。お前さんは孫公が死ぬのは天罰だ、神が表に現はれて善と惡とを立別けなされたのだと、さんく理窟を云つたぢやありませんか」

黒姫「お前さんが鎮魂しても、此黒姫の神力がお前に憑つたのだから、孫公が神徳を頂いたのだよ。きつと此黒姫が神力によつて甦らせるだけの確信を持つて居たから、泰然自若として冷静に構はて居たのだ。覺へ無くして宣旨使が驚まりますか、何事も知らずくに神標にさゝれて居るのだ。房公さん、お前の口で言つたと思つ

たら了見が違いますぞ。皆黒姫の餘徳だから、皆慢心をしたり、黒姫より私は偉い、鎮魂がよく利くなごと思ふ事はなりませんぞ」

房公「まるで高姫のやうな事を云ふ婆アさんだなア。高姫と云ふ奴は人に命を助けて貰つて置き乍ら、いつも日の出神様が、お前を使ふて助けさせてやつたのだ、お禮を申しなさい……なんて、瀬戸の海の難船の時にも救ふて呉れた玉能姫にお禮を云はせたと云ふ筆法だな。矢張り高姫仕込だけあつて負惜みの強い事は天下第一品だ。アハ、。年が寄つて雄鳥に離れると矢張り根性が拗じけると見ゆる。高姫だつて適當なハズバンドさへあれば、あんなに拗じけるのぢや無からうに、人間と云ふ者はどうしても異性が付いて居ないと妙な心になるものだ。黒姫さんを改心させるにはどうしても高山彦さんの顔を見せてあげなければなりませんまい。俺だつてお鐵の顔

を見る迄は、さうしたつて心がおさまらんからなア、アハ、、、」

黒姫 「あんまり口が過ぎるゝ又孫公のやうな目に遇ひますぞや」

芳公 「孫公のやうな目に遇つたつて構はんぢやないか。お前さん達がヤツサモツサ願いで居る中に平氣の平左で幽明界の探險をなし、平氣の平左で甦つたぢやないか。俺だつてあんな死にやうなら何度もして見たいわ」

黒姫 「罰が當りますぞや。好い加減に心を直しなさい。改心が一等だゝ神様が仰有りますぞね」

芳公 「改心しきつたものが改心せよと云つたつて、改心の餘地が無いぢやないか、オホ、、、」

黒姫 「これ芳公さん、お前は又私の真似をして嘲弄ふのだな」

芳公 「あんまり好う流行る豆腐屋で、豆腐が切れたから仕方なしにカラ買のだよ。オホ、、、」

孫公は両手を組みそろく喋り出した。

孫公 「ア、、、」

黒姫 「これく孫公さん、筑紫の岩窟は此處ぢや御座りませぬぞね。小島別の昔を思ひ出し、そんな……ア、、、なぞと云ふと、惡の性來が現はれてアフンとする事が出来ませぬぞね、ちつと確りなさらぬかね」

孫公 「アハ、、、オホ、、、ウフ、、、エハ、、、イヒ、、、」

黒姫 「又しても、曲津がつきよつたかな。これく此黒姫が神力によつて退散さして見ませう」

逢はぬ昔がましだつた

あゝゝこんな事なれば

綺麗薩張り諦めて

綾の聖地におどなく

朝な夕なに神の前

仕へて居つたがよかつたに

あゝゝ何と詮方も

泣くゝ歸る呆れ顔

あこがれ慕ふハズバンド

頭の長い福録壽さん

蜻蛉の島に御座るぞや

蟹のやうなる泡吹いて

あらぬ夫を探すより

早く諦め歸ぬがよい

アハゝゝハツハアハゝゝハ

呆れはてたる次第なり

あゝ、惟神々々

御靈幸倍ましましてよ」

黒姫はつと傍により、

黒姫

「いづれの神様のお憑りか知りませぬが、今承はれば高山彦は蜻蛉島に居る、此
亞弗利迦には居ないと仰有いましたが、それは本當で御座いますか。孫公に憑つた
神様、どうぞ黒姫の一身上にかつた大問題で御座いますから、好い加減の事を云
はずとハツキリと云つて下さい。聞いて居ればアゝゝアゝア盡して仰有つたが
そんな事を云ふて此黒姫をちよろまかし、アフンとさせんとする悪い企みぢやある
まいかな。飽きも飽かれもせぬ高山彦さんの行衛、どうぞ明かに知らして下さい」
孫公「イヒ、ヒツヒイヒ、いつ迄尋ねて見たとこが

命に替へたハズバンド 居所分る筈はない
色々雑多とイチャついた 往とし昔を思ひ出し
色に迷ふた黒姫さん いかにか心配遊ばして

色迄青うなつて来た

異國の果てを探しても

居ない男は居はせぬぞ

意外もく大意外

命に替へた高山彦さんは

伊勢屋の娘の虎さんご

意茶つき廻つて酒を呑み

意氣揚々と今頃は

石の肴を前に据ゑ

固い約束岩の判

石に證文書き並べ

いよ／＼眞の夫婦ぞご

朝から晩迄楽しんで

意茶つき暮す面白さ

伊勢の鮑の片思ひ

何程お前が探すども

高山彦は黒姫に

唯の一度も遇ふてはくれぬ

あゝ、惟神々々

叶はんならば逸早く

綾の聖地に立ち歸り

意茶つき暮らす兩人の

生首ぬいてやらしやんせ

ウフ、フツフ ウフ、フ、

黒姫

「これ孫公さん、私を馬鹿にするのかい。本當の事を云うて下さい。是程黒姫が生懸命になつて尋ねて居るのに、ウフ、フ、フ、とは何の事だい。大方お前さん達は此二人の代物と腹を合せ、死真似をしたのであらう。ほんにく／＼油断のならぬ代物だなア」

(大正一一、九、一二、舊七、二一、加藤明子録)

第三章 障 文 句 (九四四)

孫公は委細構はず神懸となつたま、諦ひ續ける。

孫公「ウフ、フーフウフ、、、 良金神現はれて

有象無象を立別ける うつ、を抜かした黒姫が

浮世氣分を放り出して ウロ／＼此處迄やつて来た

うるさい男の後追ふて うんざりする様な惚氣方

浮世の常とは言ひ乍ら 憂身をやつす戀の關

ウラナイ致の看板を 打つて一時はメキ／＼と

羽振を利かした黒姫も 高山彦のハズバンド

うつかり貰ふた其爲に 憂世の味を覺へ出し

心の空も迂路々々ど 行衛定めぬ旅の空

動きのえれぬ目に會ふて 珍の聖地を立ち離れ

渦巻亘る海原を 越えて此處迄ウヨ／＼と

迂路つき来る憐れさよ 狼狽者の宣傳使

黒姫さんの甘口に うまく乗せられ我々は

牛に曳かれて善光寺 詣る婆さんの後につき

移つて来たのは亞弗利加の 憂世離れた筑紫島

瓜の様なる細長い 壽老頭の老爺をば

憂身を獲して追ふて来る 煩さい女が唯一人

蛆虫見た様な魂で

迂路々々やつて來られては

如何に女に熱心な

高山じやまで煩さかる

煩さの婆婆に永らへて

憂目を見るより逸早く

改心した方が宜からうぞ

引曰見た様な尻をして

ウロ／＼したとて仕方ない

あ、惟神々々

煩さい事ではないかいな

こんな處にマゴ／＼と

致して御座る暇あれば

一時も早く火の國へ

足を早めて行きなさい

顔は違つか知らねども

高山彦が御座るぞや

その又高山彦さんは

神素盞鳴大神の

入人乙女の其一人

愛子の炬も云ふ方が

朝な夕なに侍づいて

家事萬端は言ふも更

痒い處に手の届く

水も洩らさぬ勤め振り

高山彦の神さんは

笑壺に入つて脂下り

わらい機嫌で御座るぞや

あ、惟神々々

黒姫さんにあんな處

一目見せたら如何だらう

忽ち二つの目を釣つて

鼻をムゲ／＼口歪め

恨みの炎は忽ちに

天の雲迄焦すだらう

高山彦は偉い奴

五十の尻を結んだる

孫垂婆と事變り

雪を欺く白い顔

ポツテリ肥た膚の色

何處に言分ない娘

女房にもつて朝夕に

愛子々々愛で給ふ

他所の見る目も羨りいよな

誠に立派な夫婦ぞや

エへ、へッへ、へ、へ、へ、

黒姫

「これく孫公さん、お前それは本當かい。あの高山さんが愛子姫と云ふ、天の岩戸を閉めた素盞鳴尊の娘うちよを女房に持つて、火の國に御座らつしやるは合點の行かぬ話だ。高山さんに限つてそんな筈はないのだが、何卒本當の事を云つてくれ。如何に氣樂な黒姫でもこんな事を聞くと、如何しても聞き逃しが出来ませぬ。さあ何卒早く虚實を明かに答へて下さい」

房公「黒姫さん、孫公があんな事言つて擲擲つて居るのですよ。本當にしちやいけませぬぜ。……ナア芳公、きうも怪しいぢやないか」

芳公「いや、俺は決して怪しいとは思はぬ、よう考へて見よ。最前からの様子、如何しても人間の悪戯とは思へぬぢやないか。屹度神様のお告に間違ひは無からうぞ」

房公「それでも言ふことが矛盾して居るぢやないか。高山彦は綾の聖地に伊勢屋の娘と暮らして居ると云ふかと思へば、火の國に今は愛子姫と脂下つて居ると云ふなり、何が何だかチツとも譯が分らぬぢやないか」

芳公「それもさうだなア。大方狂津が憑つたのだらう。……おい孫公、シツカリせんかい。貴様は目を廻しやがつて矢張り氣が遠くなつたと見れば、そんな矛盾の事を吐くのだらう。チツモしつかりしてくれないか。俺達もこんな處で發狂されては心細いからなア」

黒姫「いかにも房公さんの言ふ通り、孫公の言ふ事は前後がチツとも揃はない。狂津と

云ふものは、賢い様でも馬鹿な者だなア。高山さんが自深島に居ると云ふかと思へば、火の國に居ると云ふなり、何が何だか譯の分つたものぢやありませんわい……人を力にするな、師匠を杖につくな……と云ふ教がある。こんな男の神懸に、誑かされて居つては三五教の宣傳使もさつぱり駄目だ。さあ、房公さん、芳公さん、こんな男は此處に放棄つておいて筑紫の巖窟迄行きまじう。そこ迄行けば屹度巖窟の神様が正確な事を聞かして下さるに相違ありません。さあ行きませう」

房公「巖窟の神様に昔の小島町の様に五大觀の言靈攻に會はされては堪りませぬぜ。随分疵持つ足の我々だからそんな危険區域の地方へは寄りつかない方が捌巧ですよ」

黒姫「又おじさんは何の門の退嬰主義を採るのか。三五教は進展主義ですよ。決して退却はなりません。小島別の神さんだつて、終には建日別命と云ふ立派な神にな

つたぢやないか。屹度悪い後は善いときまつてるから。さあ早く行きませう」

芳公「黒姫さん、孫公さんはお連れになりませぬか？」

黒姫「来るものは拒まず、去る者は追はず、孫公さんの自由意思に任せませうかい」

芳公「これ孫公さん、電燈を一所に黒姫さんの後について行かうぢやないか。何時迄もこんな處でア、オ、ウと言霊もじきをやつて居つても、天から脱線だらけだから、流石の黒姫さんも愛想つかしをなさつた位だから、誰も聴者があるまい。さあ俺と一所に行かう」

と言ひ乍ら孫公の左右の手をグツと握り引き立たさうとする。孫公は地から生れた岩の様に何程のすつても引いてもビクとも動がず、只一言

孫公「俺の自由意思に任せんだ」

と言つたきり目を閉ぢ無言の儘坐つて居る。黒姫は委細構はず言豐の濁つた宣傳歌を
謠ひ乍ら、風當りのよき谷道をスタ〜と登り行く。房、芳の二人は孫公に心を惹か
れ乍ら、後振り返り〜嫌さうに黒姫の後に跟いて行く。

黒姫は漸くにして其日の黄昏、筑紫の巖窟建日別の舊蹟地に辿り着いた。

黒姫「さあ、此處は有名な小島別命が、月照彦の神様の神靈から脂をどられ出世した
目出度い處だ。皆さん、一同に天津祝詞を奏上しませう」

房公「先づ第一に高山彦様の御安泰を祈り、第二に黒姫様の御改心を祈り、第三に孫公
さんの御出世を祈る事にしませうか」

黒姫「わ、又しても〜、高山さん〜と云つて下さるな。高山さんは妾の夫ですよ
お前さん等に名を呼ばれると、あんまり心持がよくありませんからな」

房公「第二の亭主だから名を言はれても減る様な気がなさいますナ」

黒姫「今日限り高山彦さんの事は言つちやなりませぬぞや。それよりも第一に神様の事
を云ひなさい。心得が悪いと又此處で孫公の様な目に會ふて、脛腰が立たず口ばか
り達者な化物になつて了ひますよ。黒姫に敵たうた者は誰も彼も皆あの通りだ。さ
あ〜皆さん、祝詞を済まして今晚はおとなしく此處で寝みなさい。私はこれから
神様にお伺ひをせなくてはならない。お前さん達が起きて居ると悪の靈が混線して
はつきりした神勅が受けられませぬからな」

房公「黒姫さん、貴女は宣傳使にも似合はず、實に冷酷なお方ですな。太平洋を渡る時
は、我々三人の者が居らなくてはならない者だから、何と言はれてもおとなしく俺
達の機嫌をこつて御座つたが、此島に着くや否や、高山彦さんが御座ると思つて俄

「權豪がひきくなり、我々を邪魔者扱ひにされる様子が見えて来たぢやありませんか」

芳公「戀に焦れた五月水、秋田になればふられ水……だ。秋風が吹いてからは冷たい水は必要がないと見落るわい。長老の冷水とか云つて、さうく此處でさんも冷水になりかけたのだよ。それだから人間をあてにしても駄目だと云ふのだよ。こんな婆アさんの後について来るよりも、矢張り孫公さんの側で看病して居つた方が宜かつたなア。さあ今頃は孫公さんは……房、芳の兩人は友達甲斐もない奴だ、俺の危難を見捨て、萬里の異郷に……と云つて嘸怨んで居るであらう。あ、本當に友人の信義を忘れて居つた。これと云ふのも黒姫と云ふ黒い雲が包んで居つたからだ。さアこれから孫公さんを迎へに行かうぢやないか」

房公「迎へに行かうと云つた所で、此通り四邊が眞闇になつては危なうて歩く事が出来んぢやないか。まあゆつくりと氣をおちつけて、明日の朝迄此處で夜を明かし、改めて足許が分つてから慰問使となつて行かうぢやないか」

芳公「此處でドツサリと慰問袋の用意をして置かうぢやないか、アハ、ハ、」

黒姫「これく兩人、聞がりに何をグズクと、云つて居るのだい。早く寝みなさらぬか」

房公「何分、黄金の玉と麻道の寶珠が私の天眼通にチラつき、高山彦さんが愛子姫さんと抱擁接吻して御座る状態が、パノラマ式に眼底に映るものだから氣が揉めて寝られませぬワイ。これを思ふと修羅が燃えて折角染た頭髮までが禿る様な氣分になりますな……オットドツコイ何時の間にか黒姫さんの靈が半分ばかり憑つたてみ

わる。オホ、、」

芳公 「これ高山彦さん、お前さんも餘りぢや御座んせんかい。龍宮の一つ島までも手に手を執つて玉探しに行き、クロンバー／＼と云つて可愛がつて下さつたが、男心と秋の空、變れば變る世の中ぢや。六十の尻を作つて、未だ三十にも足らぬ愛子姫とやらを女房に持つとは、量見がチと違ひはしませぬかい。お半長右衛門よりも年が違つてる女房を持つて、それが何名譽で御座んすか。わー口惜い、残念な、(サワリ)折角長の海山を越へ、お前に會ひ度い／＼と、苦勞艱難しながらも、此處迄尋ねて来た妾、鶴の尾を切つた様に、思ひきるとは、それや聞かせぬ高山彦さん オツチン／＼……」

房公は作り聲をして、

房公 「アイヤ黒姫、そなたの心は察すれども、雀百まで雌鳥を忘れぬとやら、棺桶に片足突込んだ白髪頭の鐵苦茶婆よりも、今を盛りと咲き匂ふ、水も滴る様な愛子姫の香りに、サツバリ此高山彦も精神頭倒し、麝香の香に比して蕪嗅の臭に似た蕪婆に如何して一所になる事が出来やうかい。思はぬ望みを起すより、思ひきつて國許に歸つたが宜からうぞや。武士の言葉に二言はない。その手を放しや……と衝つ立ち上り、一間にこそは入りにけり。チャ／＼チャン／＼とや」

芳公 「そりや聞かせぬ高山彦さん、お言葉無理とは思へども、初めて會ふた其日から壽老の様な長頭、南瓜の様によく光る、若い時から皺だらけ、翠玉に目鼻をつけた様な其お顔立ち、こんな男を添ふたなら、何時迄もお顔の色は變るまいと、そればかりを楽しみに、ウライナイ教の教理に背き、お前を夫に持つたのは、よもや忘れ

ては居やしやんすまい。思へばく残念ぢや口惜いわいな……と取りすがつて、涙さき立つ口説き言、オホ、……」

黒姫「これく兩人、又してもく妾を擲捨ふのかい。あんまり馬鹿にしなさるな。女一人と侮つて無禮な事ばかり仰有るが、今に高山彦さんに出會つたら、お前の無禮を殘らず申上げるから、其時には何程謝つても見見はしませぬぞや。チツと嗜みなされ」

房公「何だか知らぬが、高山彦や黒姫さんの靈が兩人の身体に憑依して、あんな事言ふのだもの、仕方ありませんわ」

黒姫「大方、孫公の靈が憑いたのだらう。これはから妾が聞がりだけと鎮魂してあげませう」

と云ひ乍ら双手を組み天の數歌を一生懸命に詠ひあげ

黒姫「國治立大神様、豊國姫大神様、日の出神様、龍宮乙姫様、木花咲耶姫大神様、何卒一時も早く高山彦に會はして下さい。次には此兩人に憑いて居る惡靈を速に退却させて下さいませ。憐れな者で御座いますから……」

此時間かりにガサリくと何者かの足音が聞け、傍の岩窟の中へ這入る様な氣配がした。

(大正一一、九、一二、舊七、二一、北村隆光録)

第四章 歌

垣（九四五）

三人は暗の中に端座し、寝つきもならず、夜の明けるのをもどかしげに待つてゐる。忽ち傍の岩窟より「ウー／＼」と唸り聲が始まつた。夜は既に丑滿の刻である。森羅萬象寂として聲なく、蚯蚓の鳴聲さへ聞ゆる静かさであつた。そこへ岩窟の中からウー／＼と唸り聲が聞えて來たのだから、一層三人の耳には嚴しく感應へるのであつた。岩窟の中より何者の聲とも知れず

「エ、／＼、わぐたらしい婆アだの。折角ここ迄連れて來た力になつた孫公を途中に見すて、自由行動を執るとは、實にわぐい悪魔のやうな精神だ。此世の閻魔が現はれて、汝が襟首取つ掴み、千仞の谷間へ放り込んでやらうか。

オ、鬼か大蛇か曲神か。譬方なき人非人、戀の暗路に踏み迷ひ、はる／＼と年老つてから、亞佛利加三界迄、犬が乞食の後を嗅つけたやうにやつて來るとは、さても／＼見下け果てたる婆アぢやなア。

カ、烏の様な黒い顔を致して、何程秋波を送つても、高山彦は見向きも致そまいぞや。かけがへのない大事の男だど、其方は思つて居るだらうが、高山彦は天空海淵、汝が如き婆アには一瞥もくれず、到る處に青山あり、行先や我家で、世界の女は残らず我妻ど、極端に慈善主義を發揮し居る、氣の多い男の愛を、獨占せうと思つても駄目だよ。早く、カ、改心致して歸つたがよからうぞ。

キ、氣味の悪い此谷合で、夜を明かし、月照彦神に散々脂を絞られて苦しむよりも、一時も早く自轉倒島へ立歸れ。神は嘘は申さぬぞよ」

黒姫首を傾げ乍ら………とことはなしに、最前の孫公の聲に能く似てゐるなア………と半信半疑の念に驅られてゐる。

黒姫「コレ、何者の悪戯か知らぬが、此暗い夜さに、そんなせうもない言靈は止めて貰ひませうかい。アタ面白くもない、悪神さん迄が、高山彦くくと云つて、此黒姫をからかふのだな。随分柄の悪い厄難神だなア」

房公「モシ黒姫さん、お前さんはそれだから可かねと云ふのだ。神様に口答へをするといふ事がありますか」

黒姫「黙つてゐなさい、子供の口出しする所ぢやありません。黒姫には勿体なくも、龍宮の乙姫様が、御守護遊ばして御座るのだから、天地の間に恐るべき者は、國治立命様只一方許りだ。其他の神々は皆枝神さんだ。其國治立命様の片腕になつて

御働き遊ばす龍宮の乙姫様の………へん生宮で御座りますぞ。何ほ暗いと云つて、餘り見違をして貰ひますかい………なア龍宮の乙姫様」

房公「へー、永らく龍宮の乙姫さんをお聞きませなんだが、一体どこへ行つて御座つたのですか」

黒姫「龍宮の乙姫様の肉體は即ち黒姫だ。黒姫の靈は即ち龍宮の乙姫様だ。それが分らぬやうな事で、三五教の信者と云へますか」

芳公「私は又、龍宮の乙姫様はモット立派な御方で、其御神力の億萬分の一程黒姫様に靈が憑つてゐるのだと思つてゐたのだが、黒姫様の靈が全部龍宮の乙姫と聞いては最早乙姫様を尊敬する氣がなくなつて了つた。何だ阿呆らしい、こんな事なら、はるく可愛い女房子を棄て、茲迄從いて來るのだなかつたになア。孫公はあんな

目にあはされて、くたばるし、黒姫さんの箔はサツバリ剥けるし、岩窟の中からは怪体な聲がするし、夜は追々更けて来る。あゝ是程カツカリした事があらうか……なア房公、夜が明けたら、お前と二人、孫公の坐つてゐる所へ往て助け起し、三人は元の聖地へ歸らうぢやないか。本當に馬鹿らしい目にあつたものだ」

黒姫 「コレ〜兩人、お前は此黒姫をまだ了解してゐないのだなア。千變萬化、變幻出沒極まりなき龍宮の乙姫様の御神力を御存じないのだなア。抑も龍宮の乙姫様は、一朝時を得れば、天地の間に蟠り、風雨雷電を起し、地震をゆらし、大國治立尊の御神業の片腕に御立ち遊ばすのだ。今日は乙姫殿の蟄伏時代だ。時到来すれば、蛟螭、蚯蚓と身を潜めて、所在天下の辛酸を嘗め、救世済民の神業に奉仕してゐるのだよ」

芳公 「ヘーン、高山彦のハズバンドをはる〜搜しに廻るのが、それが救世済民の御神業と申すのですか。何と妙な救世済民もあつたものですか」

黒姫 「エ、喧しい。ホヤ〜信者の身を以て、宣傳使の心中が分つて堪るものか。高山彦様は因縁の身魂、此身魂と夫婦揃はねば、經緯の仕組は成就しませぬぞや。それだから、黒姫がはる〜と高山彦様を尋ねて来たのだよ。男早もない世の中に高山彦さんの様な老人を、戀や色で、さうして斯んな所迄尋ねて来る者がありませうか。何程色の黒い黒姫だとして、ヤツバリ女は女だ。捨てる神もあれば拾ふ神もあるのだから、男が欲しければ、高山さんだなくつても、澤山にありますぞや。人民と云ふ者は直そんな所へ心を廻すから困つて了ふ。チツとお前さんも凡夫心を捨てなされ。大神様が笑つてゐらつしやいますよ。」

君ならで誰をか知らぬ我心

高山彦の夫ぞ尊し。……………オツホ、

房公「へーん、さもないでも理窟はつくもですなア。イヤもう貴女の能辯にはサツバリ

寒珍仕りました。イヒ、

岩窟の中より

「イ、いや廣き筑紫の島を捜す共

高山彦の影だにもなし。

うろ／＼とそこら邊りをうろついで

しまひの果に糞糶むなり。

あこがれてここ迄來る黒姫も

アフンと致して泡を吹くなり。

遠國を股にかけたる黒姫も

詮方なさに涙こぼしつ。

オースタリヤ龍宮島に渡り來て

玉も取らずに歸る憐れさ。

かしましき高姫司に従ひて

竹生の島に玉をさがしつ。

來て見れば眞つ暗やみの岩の前

怪しき聲の聞え來る哉。

暗がりに何か知らぬが物を言ふ

狐狸と迷ふ黒姫。

怪しからぬ悪い心を發揮して

孫公さんを見殺しにする。

今夜こそ一つ脂を取つてやろ

二つの眼白黒姫の顔。

さてもく迷ひ切つたる黒姫の

戀の暗をば如何に晴らさん。

白波を押し分け来る四人連れ

黒姫司の口車にて。

ス々／＼と此れの谷間を登り来る

黒姫の面青く見わけり。

瀬を早み岩にせかるゝ谷川の

別れて末にあはれんぞ思ふ。

空を行く雲を眺めて思ふかな

高山彦の峰はいかにこ。

立替ちや立直しちやと其處ら中

立つて騒いだ黒姫の尻。

千早振神代も聞かず黒姫の

黒き心は顔に出にけり。

月照の神の命の鐘まりし

鏡紫の不知火

此岩穴の恐ろしきかな。

手に合はぬ黒姫なれど岩窟の

神の足には踏まれてぞ行く。

トコトンの改心出来るそれ迄は

高山彦は姿見せまい。

何事もおのれの我では行かぬもの

高姫司の改心を見よ。

西東北や南と駈まはり

玉を捜した心愚さ。

烏羽玉の暗より暗き黒姫が

心の空を照せたきもの。

ねんごろに月照彦が説きささす

道を畏み守れ三人等。

のど元を過ぎて熱さを忘るてふ

黒姫司の心果敢なさ。

春すぎて夏すぎ秋の夕間ぐれ

衣の袖に露ぞこぼる。

久方の高天原を立出で、

つくしの島に何をさまよふ。

フサの國北山村の館をば

後に眺めて黒姫の空。

黒姫が心の倉を打あけて

見れば大蛇がうごなはりゐる。

怪しからぬ變性女子の行ひを

何も知らずに吐く黒姫。

屁理窟を朝な夕なにまくし立て

人に嫌はれ國を立ち去る。

惚々として高山彦に目尻下げ

涎をくつた昔戀しき。

増かどみ見んと思へば黒姫の

心の塵を吹き拂へかし。

身はここに心は高山彦の前

朝な夕なに神を忘れて。

むつかしき其面付は何の事

高山彦に嫌はれぬよに。

目をあけておのが姿を省みよ

高山だとして愛想つかさん。

もろくの心の罪を吐き出して

神の御前に宜り直しせよ」

黒姫は稍氣色ばみ乍ら、聲する方に向つて

黒姫

「や、こころ暗の中から聲出して

口さわがしく何吐くらん。

いろくゝと人の欠點をば並べ立て

それで氣のすむ奴は曲神。

うかくと聞いてはならぬ房公よ

芳公腹の据ゑ所ぞや。

幽霊のやうに取りとめないことを

岩にかくれて吐く曲神。

えら相に月照彦の眞似をして

囀る奴は孫公なるらん。

世の中に恐ろしい者はない程に

おとしの利かぬ黒姫を知れ。

來年のこと言や鬼が笑へ共

我行く末を見て居るがよい。

理窟計り吐く舌こそ達者でも

身の行ひのそはぬ孫公。

累卵の危き身とは知らずして

黒姫さんを矚る身知らず。

戀慕した高山彦のこと許り

意地くね悪い孫公が言ふ。

ろくでない其託宣はやめてくれ

耳がいとなる腹が立つぞよ」

岩窟の中より、一層大きな聲で

「わからない奴は黒姫許りなり

暗に迷ふも無理であるまい。

あつまでも戀の虜となり果て、

茲迄来たか可哀相な婆。

うつ、にも夢にも高山／＼と

吐く言葉を聞くぞうたてき。

えん切つた男の尻を追ひまはし

アフィンとやせんアフリカの野で。

をに大蛇 狼 さやぐアフリカの

荒野さまよふ戀の虜が。

ウツフ、、、イツヒ、、、

是れからは月照彦も宿を替へ

火の都へと進みゆかなむ。

黒姫よ胸に手をあて思案せよ

高山彦は獨身でないぞよ。

房公よ早く心を改めて

黒姫さんを思ひ切るべし。」

芳公よよしや天地は沈む共

黒姫司に従いちやならぬぞ。

孫公はモウ今頃は火の國の

高山彦の側にゐるだろ。

高山の彦命は黒姫の

様な女房は好かれまいぞや。

淡雪の若やる胸をそだたきて

玉手さしまきいねます高山彦。

黒姫がこんな所を眺めたら

さぞや目玉を白黒にせむ。

まなじりをつり上げ口を尖らして

鼻息あらく熱を吹くらむ。

いざさらば月照彦もこれよりは

黒姫司をみすて、ぞゆく。

小島別教司の其昔

あらはれまし、岩屋戀しき。

古の建日の別の御跡を

後にみすて、行くぞ悲しき。

孫公はさぞ今頃は面白く

可笑しき歌をうたひ居るらむ。

アハ、、、オホ、、、と笑ひこい

エヘ、、、イヒヒ、今こゝを去る。

暗の夜に鳴かぬ鳥の聲まじは

あはれぬ先の高山彦ぞ戀しき。

黒姫がいかにか心を焦す共

高根の花よ手折られもせず。

今頃は高山彦は聖地にて

伊勢屋の娘と酒を呑むらむ。

如意寶珠 紫玉は云ふも更

黄金の玉は愛想つかして。

黒姫に脇鐵砲をくはしつ、

自轉倒島にかくれましけり」

と云つた限り、足音を忍ばせ、何處ともなく行つて了つた。

黒姫 「コレ房、芳の兩人、今の歌を聞きましたか、怪しからぬ事を云ふじやないか」

芳公 「何だか知りませんが、實に感心な歌でしたよ、あの神さんの云つた通りですもの

餘程黒姫さんも、神界迄ローマンスが話しの種になつてるとみえますな、アツハ、

、、」

黒姫 「オホ、、、」

(大正一一、九、一二、巻七、二二、松村真澄録)

第五章 對

歌 (九四六)

房公は、今の歌に引出され自分も歌心になつたと思ひ、黒白も分ぬ闇の中から腰折れを語り出した。

房公 「房公がいざこれよりは歌をよむ

黒姫さんよ確りと聞け

野も山も青く茂れる筑紫野に

黒い女が一人立つなり

如意寶珠玉の所在を尋ねたる

高姫司は今やいづくぞ

黄金の玉の所在を尋ねたる

黒姫さんは今は男尋ねつ

高山の彦の夫にはじかれて

耻も知らずに探し来るかな

黒姫を龍宮さんの乙姫と

思ふて來たが馬鹿らしきかな

我妻のお鐵は嘸や今頃は

空を眺めて待ち詫るらん

我妻よお鐵よしほし待つてくれ

愛の土産を持ちかへるまで

筑紫の不知火

七四

黒姫が 夫を思ふ真心を

汝に移して喜ばせて見ん

房公も遙々海を渡り來て

妻のみ戀しくなりにけるかな

こんな事ばかり云ふのぢやなければども

黒姫の御魂憑りしたためぞ

神様の道を忘れて妻ばかり

思ふ心の愚しきかな

村肝の心を妻に筑紫淵

深き心を不知火の汝

如何にせん海洋萬里の浪の上

翼なき身のもごかしきかな

黒姫の甘き言葉に乗せられて

知らね他國で苦勞するかな

今頃は四尾の山も紅葉して

鎌の宮は變ねますらん

言依の別の命の御姿

目に見る如く思はるゝかな

左助の神の司の御姿を

思出して心勇みぬ

黒姫のけけんな顔を見る毎に

浮世は厭になりけるかな

来て見れば眞闇がりの岩の前

怪しき神の聲ぞ聞ゆる

黒姫が負す劣らず腰折れの

歌よみし時ぞおかしかりけり

芳公よ貴様も一つ歌を詠め

歌は心の闇を晴らすぞ

闇々と闇の帳に包まれて

黒姫さんの黒顔も見えず

アハ、、、オホ、、、ホッホ、ウフ、、、

エヘ、、、イヒ、笑ひ置くなり」

芳公は負ん氣になつて又歌句り出した。

芳公「芳公が宜る言靈をよつく聞け

玉をころばす様な音色を

一條や二條繩でゆかね奴

三筋の糸で縛る黒姫

孫公は今ほきうして居るだらう

心にかゝる闇の世の中

是程の無情な女ぞ知らずして

ついて来たのを悔しくぞ思ふ

惟神 神の教に離れたる

黒姫こそは曲神ならん

曲神の醜の猛びを恐れつゝ

間近の曲を知らざりし我

三五の誠の道を教へ行く

神の司が船を盗みつ

此船は老朽たれど高山の

彦の命を乗するなるらん

開がりの臭い谷間に包まれて

息はづまして暮らす苦しさ

是よりは黒姫さんに暇くれて

房公さんと國へ歸らん

房公よ思ひ切るのは今なるぞ

乙姫さんの現はれぬうち

龍宮の乙姫さんの生宮に

はしやがられては堪らざらまし

サア早く黒姫さんに立ち別れ

立ち去り行かん火の神國へ

逸早くこれの谷間を立ち出で

高山彦に注進やせん

注進を聞いて高山驚いて

姿かくせば嘸面白からん

さうならば黒姫如何に騒ぐとも

後の祭の詮術もなし

アハ、、、オホ、、、ホッホ、ウフ、、、

エ、イ、加減に止めて置くなり」

黒姫は闇の中より聲を張り上げて

黒姫「房芳の二人の奴等よつく聞け

龍宮様の神の教を

瘦犬のやうな面してつべこべと

囀る姿臍をよるなり

何事も知らざる癖に黒姫の

小言云ふとは怪しからぬ奴

黒姫は誠の神の生宮ぞ

思ひ違ひをするな房芳

房公よよしや天地はかへるども

高山彦は黒姫の夫

高山の我脊の命に出遇ひなば

汝が無禮を告げて聞かせん

獨身の黒姫なりと侮つて

後で後悔するな兩人

後悔は先に立たんと云ふことを

よくわきまへて口を慎め

口許り千年先に生れ来て

吐く曲神の愚しきかな

これ位分らぬ奴が世にあらか

黒姫こへも愛想つかしぬ

如何程に侮辱されてもおどなく

忍ぶは神の道知ればこそ

神の道捨てた事なら黒姫は

赦しちや置かね房芳の奴

房芳よ早く心を立て直し

誠の道に歩みかへせよ

黒姫の言葉がお氣に入らぬなら

お前の勝手にするがよからう

待て暫し今兩人に逃げられちや

此黒姫も一寸迷惑」

房公「さうかいな一寸迷惑なさるかな

火の都では大の迷惑

高山と黒姫司の争ひを

今見るやうに思はれにけり

黒姫が死ぬの走るの暇くれと

怪氣の聲を聞くぞうたてき

うたくと聞の帳に包まれて

明かりの立たぬ歌を讀むかな

疑ひの雲霧晴れて黒姫の

心の空の光る時まつ

松が枝に鶴の巢籠る悦びを

愛子の姫が先にせしめつ

サア締めたもつと締めたと兩人が

四疊半にてしめりなきする

此處黒姫さんが見付けたら

嘸しめんと濡るだらうに

遙々と尋ねて来たに夫の家は

入つちやならぬと戸をしめの家

面白いあ、おかしいと手を打つて

笑ふ時こそ待たれけるかな

アハ、、、ウフ、、、オホ、、、

縁起でもない云ひ草ぞ聞く」

芳公は又もや聞がりから謠ひ出した。

芳公「ほのくゝと夜は明け近くなりけり

早立ち往かん火の國都へ

やがて又烏や雀が鳴くだらう

烏ばかりか泣く人がある

まごゝと此處にかうしちや居られない

孫公さんは先にいただらう

孫公の後おつけて進む身は

黒姫さんが邪魔になるなり

顔ばかり黒姫さんと思ふたに

心黒しと知らず居たりし

何事もよしと呑み込む男達

よしや此身は朽果つるとも

頼まれた事は後へは引かぬ俺

されど手をひく黒姫評りは

手を引くといつてもこれの山坂を

手を曳くのではない黒姫婆さんよ

手を曳いて登り度いとは思へども

生憎お瀧が居らぬ悲しさ

お瀧殿今頃は膝坊に

かゝへて此方を眺め居るらん」

房公は又もや歌ひ出した。

房公「のろけないこりや芳よあんまりだ

俺もお鐵が國に居るぞよ

色白のお鐵のやうな妻なれば

のろけてもよしほめるのも芳

さりながらお瀧のやうな蜥蜴面

ちと心得よ見つともないぞよ」

芳公「何吐す、蜥蜴面とは誰に云ふた

黠面した嬬を持ちつ、

柿の木に雨蛙奴が登るよな

でかいお鐵を夢に樂しめ

鐵のよな黒い顔した女房を

ぶさいくなとは思はぬか惚た弱みで」

黒姫「矢筈しい雲雀のやうな二人共

もう夜が明けた手水つかへよ

サア早く天津祝詞を奏上し

朝餉すまして出立をせよ

無花果の木の實はこゝにあるけれど

雲雀に食はす無花果はなし

惟神 神の御靈の幸はいて

此の無花果は命助ける

麥の種があれば雲雀もよかろうが

實に氣の毒な次第なりけり

兵糧さへ澤山あれば山坂を

越ねるも安し神の御惠

御惠に外れた二人のいぢらしさ

空腹かるらん房、芳隣れ

隣れをば知らぬ我にはあらねども

餘りの事に呆れ果てけり

高山の我春の君が待つと聞く

火の國都へ急ぐ樂しさ

黒姫は兵糧もたんと持つて居る

一宿二宿三宿のため

房公 「これや婆さん一つ俺にも分配せ

餘り冥加が悪からうぞや

桃太郎が鬼ヶ島へ往く時も

團子半ぶんやつた事思へ

黒姫 「犬なれば半分位やろも知れぬ

欲しくばワン／＼鳴くがよからん」

芳公 「ワン／＼と犬の鳴き真似するよりも

雉の真似してケン／＼と云ふ」

黒姫 「ケン／＼と吐く雉にはやりはせん

猿のやうにキヤツ／＼と鳴け」

房公 「馬鹿にすな婆々の辯して桃太郎の

氣取りで居るとは片腹痛い」

黒姫 「片腹が痛い云ふのは嘘だらう

兩腹すいた、喰いたからうに

痛々しその面つきを見るにつけ

無花果の皮でもやり度ぞある」

芳公 「食物は神の興へと聞くからは

其無花果は俺の物だよ

黒姫が獨占しやうとほそりや無理だ

天則違反の罪に問ふぞよ」

黒姫 「先取權この黒姫にあるものを

掠奪するならして見るも芳

掠奪の罪を重ねて天國の

きつき戒め喰う隣れさ」

房公 「喰ふのが隣れさと云つた黒姫が

持つた無花果喰う嬉しさ」

黒姫「房、芳の二つの雲雀に暇とられ

早日の神は登りましけり

カア〜と鳴いた鳥に與へよか

雲雀に喰はすを惜く思へば

さり乍ら此雲雀とて天地の

みたまと思へば捨て、置かれず

サアやらう一つ喰へと投げ出して

社會奉仕の善業つまん」

房公「有難う黒姫さんの奮發で

いちじく二じく三じくを喰ふ」

芳公「味のよい無花果だけは黒姫が

喰ふた後のかすをくれけり

かすでさへ是程甘い無花果は

上等物はいかに甘からう」

黒姫「オホ、、、」

房、芳一度に

「アハ、、、」

三人は無花果に機嫌をなほし、筑紫ヶ嶽を宣傳歌を誦しながら登り行く。

(大正一一、九、一二、舊七、二二、加藤明子録)

第六章 蜂の巢 (九四七)

高山彦の後を追ひ

遙々來りし黒姫は

房公、芳公を伴ひて

筑紫ヶ岳を登り行く

細き谷道右左

水成岩の此處彼處

頭を擡げて居る中を

足に力を入れ乍ら

エイヤ／＼と聲揃へ

一歩々々登り行く

ウン／＼／＼と呻きつゝ

芳公は歌を詠ひ出す。

芳公「あゝ、惟神々々

御靈幸はひましまして

此急坂をやす／＼と

登らせ給へ純世姫

ウントコドツコイ息苦し

ハア／＼／＼／＼スウ／＼／＼

總て山坂登るときや

向ふを眺めちやいかないぞ

一歩々々俯向いて

梯子を登る心地して

進めば何時しか絶頂に

ウントコドツコイ着くだらう

とは云ふものゝきつい坂

お嬢の〇に上るときは

チツミは骨がある様だ

足はカモ／＼して來だす

ハア／＼ドツコイ、ウントコナ

腰の邊りがドツコイシヨ

如何やらハア／＼變挺に

フウスウ／＼、ドツコイシヨ

なつて來たでは無いかいな

高山彦へ登るのは

除程骨が折れるわい

ハア／＼これ／＼ハア／＼、ドツコイシヨ

黒姫さんよ聞きなされ

高山彦と云ふ峠

中々登り難いぞや

にくいといつてもお前さんは

ハア〜フウ〜可愛いから 可愛い男にドッコイシヨ

ハア〜フウ〜あふのたもの お前は前途に楽しみが

ウントコドッコイぶら下る 私は汗がぶら下る

こんな峠と知つたなら ウントコドッコイ初めから

私は来るのじやなかつたに 胸突坂の險しさよ

水成岩や火成岩

片磨岩かは知らねども

本當に堅い石道だ

皆さんドッコイ氣をつけよ

ウツカリ滑つて向脛を ウントコ、ドッコイ擦り剥いちや

自轉倒島にドッコイシヨ 残して置いた女房子に

あはせる顔が無い程に 房公さんも氣をつけよ

ウントコドッコイ、ハア〜フウ 芳公さんも氣をつける

黒姫さんはドッコイシヨ 高山峠を登るのだ

假令向脛ドッコイシヨ 剥いたところで得心だ

現在夫の名の様な 筑紫ヶ岳のドッコイシヨ

高山峠をフウ〜 這ふて居るのじや無いかいな

何程戀しいドッコイシヨ 高山彦でも此様な

きつい險しい心では 黒姫さんも困るだらう

ウントコドッコイ氣をつけよ そこには尖つた石がある

筑紫の國迄やつて来て　ドッコイ怪我しちや堪らない
 朝日は照ることも曇ることも　月は盈つことも虧くることも
 假令大地は沈むとも　此坂越ねばならぬのか
 黒姫さんのドッコイシヨ　ヘア／＼フウ／＼／＼スウ／＼
 戀の犠牲に使はれて　踏みも習はぬ山坂を
 登り行く身の馬鹿らしさ　ホんに思へば前の世で
 ウントコドッコイ汗が出る　如何なる事の罪せしか
 因果は廻る小車の　小車ならぬ石車
 澤山轉がつてドッコイシヨ　其處ら邊りに待つて居る
 ウントコドッコイ暑い事じや　汗と脂を絞り出し

蟬にはミン／＼鳴られ　頭はガン／＼照されて

ウントコドッコイあゝわらい　こんなつまらぬ事は無い

あゝ、惟神々々　叶はぬ時の神頼み

國魂神の純世姫　月照彦の神様よ

何卒助けて下さんせ　弱音を吹くじや無けれども

こんだけ辛らうては堪らない　どこぞ此處らの木蔭をば

求めて一服しようじやないか　ウントコドッコイ黒姫さん

も一つ無花果出しとくれ　喉がひつつきそうになつて来た

ヘア／＼フウ／＼／＼スウ／＼　こんな苦勞をするのんも

元を訊せばドッコイシヨ　みんなお前の爲めじやぞね

皺苦茶婆さんのドッコイシヨ 分際忘れて高山の

峠に登らうとする故に 俺迄迷惑するのんだ

ウントコドッコイ俺のみか 家のお嬢も困つてる

皇大神の御爲めに 御用に立つならドッコイシヨ

ごんな苦勞も厭やせぬ 思へばく馬鹿らしい

千里二千里三千里 荒浪越わてドッコイシヨ

筑紫の國まで導かれ ハアくフウくあゝ暑い

汗が滲んで目が見えぬ つまらぬ事になつて来た

ウントコドッコイ黒姫さん 一寸一服しようじやないか

何程あせつて見た處が 二日や三日や十日では

火の國都へ行かれない 叔母が死んでも食休

ドッコイシヨく 暑中休暇の流行る世に

休なしとは胸怒じや 私もさうやら尻古垂れた

何卒一服さして呉れ それく向ふの木の枝に

甘そくな果實がなつて居る あれ見てからは堪らない

もう一歩も行けません あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ オット危ない石車

スツテの事で 向脛を 傷 ひやぶる處だつた

これも矢張り神様の 深き尊き御守護

此處で休んで行きませう 御足の達者な御方等は

何卒お先へ行つてくれ 慾にも徳にも代へられぬ

生命あつての物種だ 行きつきバツタリ焼囊だ

ハア〜フウ〜〜スウ〜 如何やら呼吸がきれかけた

汗も膏も乾き果て もう一滴も出ない様に

カンピントンになりかけた ウントコドツコイ休まうか

云ひつゝドスンと腰下し 青葉の上に横たはる

黒姫、房公兩人は 渡りに舟と喜んで

木蔭に立寄り息休め 流る、汗を拭ひける。

三人は汗を拭ひ乍ら油蟬の鳴く木蔭に息を休めて居る。巨大な青蜂等が盛に襲撃する。フツと空を見上ぐれば大きな蜂の巢がぶら下つて居る。三人は「こりや大變！」

「俄に立ち上り坂道指して逃げ出す。青蜂の群は敵の襲來と見誤つたと見ね、兩方の羽翼に極力馬力を掛け、ブーンと唸りを立て三人の頭を叩きつけて襲撃する。三人は幸ひ笠を被つて居たので蜂の剣を免れ、生命辛々二三丁ばかり思はず知らず坂道を駈登つて了つた。其處には高い山にも似ず美しい清水がチヨロ〜と流れて居る。

芳公「ハア〜〜フウ〜〜……あ、有難い。こんな結構な清水が此處に湧いて居るとは心づかなかつた。丸で夢に牡丹餅を貰つた様なものだ」
と云ひ乍ら其清水を兩の手に掬んで甘そうに何杯も〜と飲み乾す。房公も次いで水を飲む。

房公「あ、有難い、助け舟に遭ふた様だ。瑞の御靈の純世姫様、生命の清水を與へて頂きました。之で瑞の御靈の御恩も適切に分らして頂きました。あ、惟神靈幸倍坐

世

芳公「黒姫さん、貴女も一杯お飲りなさつては如何ですか、随分喉が乾いたでせう」

黒姫は苦りきつた顔をし乍ら

黒姫「お前さんは本末自他公私の區別を知つて居ますか。天地轉倒したお前さんの行ひそんな水は假合渴しても飲みませぬワイ」

芳公「これは又妙な事を承はります。何がそれ程お氣に入らないのですか」

黒姫「長幼序あり、と云ふ事を忘れしましたか。何故長者たる黒姫に先に水を勧めて其後を飲みなさらぬ。若い者が先へ飲んで其後を飲めとはチツと御無禮ではありませぬか」

房公「なアんとむつかしい婆んつだ喃。後から飲んで前から飲んで水の味に變りは

あるまい。こんな處まで杓子定規をふりまわされて堪つたものじゃない。黒姫さんお前さんは部下を可愛がると云ふ至仁至愛の心に背いて居ますな。そんな事を仰せられると俺達の方にも随分言ひ分がありますよ。昔シオン山に戦ひのあつた時、言靈別命の部下に國治別と云ふ大將があつた。其時に數多の部下が敵軍の爲めに重傷を負ひ喉が乾いて困つて居つた。國治別の大將も全じく重傷を負ひ水を飲みたがつて居たが、手近に水が無いので部下の臣卒がやつこの事で谷川に下り、帽子に水を盛つて國治別の前へ持つて來た。其時に澤山の部下の臣卒は其水を眺めて羨ましそな顔色をして居た。國治別神はそれを見て自分の飲み度い水も飲まず、部下の臣卒に吞ましてやれといつて其場に討死をなされたと云ふ事だ。人の頭にならうと思へば其位な慈愛の心が無くては部下は育ちませぬよ。お前さんは永らく法螺を吹い

て宣傳をして居るが、眞味の部下が一人も出来ないので不思議と思つて居たが、矢張精神上に大欠陥がある。そんな利己主義で宣傳が出来ますか。神は愛だとか、人を救ふのが神だとか、何程立派に口先で喋り立て、も事實が伴はねば駄目ですよ。お前さんは有言不實行だからそれで我々も嫌になつて了ふのだ。水臭いと云ふのはお前さんの事だ。水の一杯位でゴテ／＼云ふのだから堪まらないわ」

芳公「オイ房公、もうそんな水臭い話は芳にせい。下らぬ水掛喧嘩になつちや瑞の御靈様に對して申譯がないからな。みず知らずの仲じやあるまいし、もうこんな争ひは綺麗薩張と水に流さうじやないか」

黒姫「能うまアツベコベと揚足をとる男だなあ。妾が不用意の間に口が辻つたと云つてそれ程短兵急に攻めると云ふのはチツとお前さんも量見があまり良くはありますま

い。人の叱言を言ふのなら先づ自分の身を省み、行ひを考へてからになさいませ
や」

と白い齒を出し願を前にニユウと出し、ニツ三ツしやくつてみせた。

房公「あ、まだこれから此急坂を随分てくらねばなるまいから、喧嘩は此處等できり上げておかうかい。さア御一同さん發足致しませう」

(大正一一、九、一二、書七、二二、北村隆光録)

第七章 無花果 (九四八)

房公は坂を登りつ、又歌ひ出した。

房公「思へば昔其昔

日の出神や祝姫

面那藝彦の通りたる

筑紫ヶ岳の山路を

黒姫さんの御蔭で

スタく登る床しさよ

房公さんはドッコイシヨ

日の出神と云ふ格だ

芳公さんはドッコイシヨ

面那藝彦と云ふ役だ

黒姫さんの御爲に

こんな山坂登らされ

ホんに誠に面の皮

晒した様なものだらう

黒姫さんは祝姫

神の命の言傳使

思つて見てもドッコイシヨ

皺苦茶婆さんちやはづまない

祝の姫のドッコイシヨ

やうな御若い女なら

少々叱言を言はれても

餘り苦しうはなけれ共

何ぢや知らんが腹が立つ

黒姫さんのウントコシヨ

方から吹来る風もいや

いやく乍ら從いて来た

ハークフークフークスーク

おれは何たる因果だろ

こんな山坂登るごこ

うちのお鐵が見たならば

ウントコドッコイ悔むだろ

さぞや歎くである程に

天道さんもドッコイシヨ

聞なませぬと取りついて

ウントコドツコイ泣くだらう 思へばくいちらしい

お鐵のことが苦になつて 足も碌々進みやせぬ

あゝ、惟神々々々 神の御靈の幸はひて

お鐵の體も恙なく 子供も丈夫でスク〜と

生立ちまして房公が 無事に凱旋するまでは

さうぞ守つて下さんせ ハ〜ス〜汗が出る

最前呑んだ清水奴が 頭の上まで上りつめ

藥鐘頭がもり出した 汗が流れて目が痛い

ドツコイ〜膝坊主が キョク〜笑うて來よつたぞ

何が可笑して笑うのだ 黒姫さんが一心に

高山峠を登るのが

ドツコイ可笑して笑ふのか

足の裏にはドツコイシヨ

痛いと思ふたらウントコシヨ

大きな豆が出来たよだ

何程マメなが能いぞても

足の豆では眞平だ

黒姫さんに豆狸

守護致してこんな事

俺にさしたぢやあるまいか

こらく〜芳公シツカリセ

お前の足は如何なつた

さしても俺は歩けない

向うに一つの樂みが

黒姫さんのドツコイシヨ

心の様にあるなれば

痛い足でも引摺つて

進み行く甲斐あるけれど

何の當途もなき涙

汗と脂を絞られて

これがどうして堪らうか ウントコドツコイ〜シヨ
 そこに尖つた石がある 氣を付けなされよ黒姫さん
 もしや怪我でもしたなれば 高山さんにドツコイシヨ
 會はすお顔があるまいぞ 怪我ない中に氣をつけて
 ソロ〜登つて行かしやんせ さはさり乍ら孫公は
 〆ここにどうして居るだろか 猿の小便きにかゝる
 かゝる處へ悠々〜 現はれ来る五人連
 三人の姿を一目見て コリヤ堪らんと逃げ出す
 怪し〜跡を眺むれば 光つた物が落ちてゐる
 矢庭に中をあけて見りや 黒姫さんが朝夕に

尋ね廻つたドツコイシヨ 黄金の玉が入れてある
 それ許りか澤山の お金がチャラ〜なつてゐる
 名さへ分らぬ甘さうな 果物迄も叮嚀に
 ドツコイ〜三人の お方おあがりなされよ
 言はん許りの顔してる 見るより三人は喜んで
 先を争ひ驚掴み グツと呑み込む其甘さ
 あ〜〜ヤツバリ夢だつた 歩き乍らにこんな夢
 見たるおかげでドツコイシヨ 喉から唾がわいて来た
 あ、惟神々々 夢でもよいから今一度
 ドツコイ〜こんな目に あはして下され頼みます

夢に夢見る心地して

行方も知れぬハズバンド

火の國都に御座るか

喉を鳴らして黒姫が

やつてゐたどこドッコイシヨ

目算ガラリと相外れ

同名異人の人ならば

それこそ夢がさめるだろ

今見た夢は黒姫の

前途の箴をなしつるか

コリヤ斯うしては居られまい

黒姫さんね、如何なさる

夜食に外れた梟の

ような六かしい顔をして

ケン／＼當つて下さるな

歩き乍らに見た夢が

どうやらお前の前途をば

知らして呉れた物らしい

ホンに怪体な夢ぢやなア

あゝ、惟神々々

夢の浮世と言ひ乍ら

こんな夢をば見せずして

お慈悲に一度黒姫を

高山彦にドッコイシヨ

會はしてやつて下さんせ

これが私の御願ぢや

芳公とても其通り

黒姫さんを敵のよに

決して思うちや居ろうまい

惜そなく顔をして

喰ひ残した無花果を

下さるやうな御親切

決して忘れちや居らうまい

此房公も黒姫に

先立ち水を呑んだとて

叱言を言はれた事丈は

水に流したと言ひ乍ら

ヤツバリ覺わて居りまする

ウントドッコイ水臭い

黒姫さんの御心底

あつく感謝し奉る

ウントコドツコイ〜シヨ

ハー〜ハー〜フリースー〜

本當に險しい坂だなア

天津御空に雲の峰

うすく黄色に光つてる

土中の熱さに蚯蚓奴が

ピン〜はね出し日に焼かれ

カンビン丹になつてゐる

命知らずの蚯蚓虫

ウントコドツコイ〜シヨ

命知らずはウントコシヨ

蚯蚓許りぢやない程に

こゝにも一人や二人ある

又もや腹が減つて来た

こゝぞこゝらに果物が

なつては居ぬかど木々の枝

ためつすかしつ眺むれど

喰へそな物は見當らぬ

困つたことが出来て来た

肝腎要な腹が減り

どうして道中がなるものか

あゝ、惟神々々

御靈幸はひまし〜て

我等三人の一行に

おいしい果物下さんせ

命カラ〜願ひます

ハー〜フ〜あゝ、わらい

二つの眼に汗にじみ

そこらが見えなくなつて来た

慙にも得にもかへられぬ

こゝで一服致しませう

芳公お前も休まうか

黒姫さんとは事違ひ

前途に樂みない二人

如何して此上きばれうか」

言ひつゝ、コロリと横になる

あゝ、惟神々々

御靈幸はひましませよ。

房公は道の傍にゴロンと横たはり乍ら、空行く雲を眺め、根めし相な顔をして黒姫を熟視してゐる。芳公も亦その傍に横たはり、足をピン／＼させ乍ら空行く雲を愉快げに見つめて何事か小聲に囁き出した。

黒姫「皆さん、モウ少し往つてから休んだら如何だなア。ツイ今清水のそばで休んで来た所ぢやないか。こんなことしてゐるよ、山の中で日が暮れて了ひますよ」

房公「ヘン、今に限つて、皆さん……と御叮嚀にお出でなすつたな。其手は喰ひませぬワイ。我々は最早機關の油が切れて了つたのだから、此上は運轉不可能だ。お前さんは心猿意馬といふ心の猿駒が火の國の都に望みをかけてゐるのだから、氣が急ぐだらう。夫程我々兩人がまごろしくあるならば、さうぞお先へ、一足やつて下さい命あつての物種だ。お前さまの戀の犠牲に貴重な命まで棒に振つては、一向計算が

持てないから、まあ此處で一つゆるりと休養を致しますワ。へー誠に御都合が御悪う御座いませうが、成行だと諦めて、御勘辨下さいませ。何を云つても、龍宮の乙姫様の御肉體だから、大した物だ。私の様な足弱は、到底貴方と同様には行きませぬワイ。斯うして大地に背中を密着させて見ると、何ともなしに氣分が宜しい。……世の中に寝る程樂はなきものを。起きて働く馬鹿のたわけ……とか申しましてなア、命知らずの向う見ずに働く様な馬鹿は、マア／＼一人位なものでせうかい、アツハ、、、ウツフ、、、」

黒姫「コレ／＼兩人、叮嚀に云へば、叮嚀に言ふと云つて不足をいふなり、さうしたらお前さん、お氣に入るのだい。ホンに／＼度しがたき代物だなア」

芳公「シロ物でもクロ物でも、到底つゞきませぬ。第一、胃の腑の格納庫が空虚になつ

て了つたのだから、施すべき手段がありません。お前さんの懐に持つて、其無花果をせめて半ヂクでも良いから、恵んで下さるに、チツと許り機關が運轉するのだからなア」

黒姫「エ、弱い男だなア。そんなら、之を一つあけるから、半分づゝに割つて、格納しなさい。そうすりや、チツと許り馬力が出るだらう」

房公「ハイ、どうせ婆アさんから貰うのだから、バカが出るのは當り前だ。併し乍ら無花果を半ヂク頂いては、腹が下る虞があるから、せめて二三ヂク下さいな」

黒姫「エ、つけ上りのした男だなア。そんなら仕方がない、秘藏の無花果だけれど、お前に上げさせろ。此峠を越す迄は果物が無いと云ふ事だから、此重たいのにむいつて来たのだ。お前達は注意が足らんから、こんな目に會うのだよ。それだから神様

が食物を粗末に致すな、何でもまつておけ……と仰有るのだ。こんな時になつて弱音を吹き、困らない様に大慈大悲の神様が、何時も御注意を遊ばすのだから、これからは氣をつけたが宜しいぞや」

房公「イチヂク御尤もで御座います。貴方の御詞を是からは、一イチヂク考致しまして、こんな破目に陥らないように心得ます」

黒姫は二人の前に懐から出しては、一つづゝ、ポイ／＼と投げてやる。二人は手早く手に受け乍ら、

「一ヂクニヂク……オット三ヂク、オット四ヂク……」
と言ひつゝ、數へ乍ら受取る。

黒姫「ホンに行儀の悪い男だなア、丸きり四つ足の容物みた様だ。せめて物食う時は起

き直り、チンとして頂きなさい」

房公 「ハイ、恐れ入りました、御注意有難う。……サア芳公さん、黒姫様の御恵みを頂

戴せうぢやないか」

芳公 「黒姫さんのおかげで、一デク、否一命が助かりました」

黒姫 「黒姫の尊いことが分つたらう」

芳公 「流石は黒姫さんです。お年をもられた効で、何から何まで能うお氣がつかますな

ア、オホ、、、」

と肩を上げ下げし乍ら、飛びつくようにして、矢庭に口の中へ挿込んで了つた。黒姫は此姿を見て吹き出し、

黒姫 「ホ、、、」

と笑ひ乍ら腹を抱ゆる。

(大正二一、九、二二、舊七、二八、松村眞澄録)

瑞 月

天津日の影は尊く清くとも

醜の村雲掩ふぞ歎てき

第八章 暴風雨 (九四九)

房公、芳公の二人は、さうしたものが、尻が大地に吸ひついたやうになつて、ピクとも動けなくなつて了つた。黒姫は「早く〜」と急ぎ立てる。されど一人の身体はピクとも實際に動かなくなつてゐるのだ。黒姫はそんなこと、は少しも氣がつかず、餘りのジレッタさに聲を尖らし、

黒姫「コレ〜兩人、お前はこんな所へ来て、此黒姫を困らす所存だな。あれ程事をわけて言ふのに何故、立たないのかい」

房公「黒姫さーん、何と仰有つて下さつても、如何したものが、チツとも足が立ちませぬワ、……なア芳公、お前はさうだ、チツと動けさうかなア」

芳公「おれも如何したものが、チーツとも動けないよ。地の底から鼈でも居つて吸ひつけるように、さうもがいたとて、動きがそれんだよ、あ、困つたことが出来た……モシ〜黒姫さん、一つ鎮魂をして下さいな」

黒姫「ヘン、今迄あれ丈能く喋り、あれ丈無花果を食つておき乍ら、そんな元氣な顔をして居つて、足が立たんの、腰が動かんの、能う云へたものだ。動けな動けぬで私は先に失禮致します」

黒姫「ピンと身体をふり、不足そんな顔をし乍ら、エチ〜と登つて行く。瞬く中に黒姫の姿は木の茂みに隠れて了つた。

芳公「オイ黒姫も餘程水臭い奴だないか、……落ぶれて袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らる、……と云ふ古歌があつたねわ、黒姫に依つて、此歌の意を實地に味はふ

「こゝが出来たぢやないか」

房公 「オウさうだ……腰ぬけて涙に曇る山の路、黒姫さんの心知らるゝ……」

黒姫が何時もペラ／＼口先で、チヨロまかしたる尾は見むにけり……」

だ。アハ、ハ、ハ、」

房公 「此様に脛腰立たぬ身を以て、人の事共誹る所か。」

「どうしても脛腰立たぬ其時は、野垂死より外はあるまい。……」

房公 「オイ、芳、そんな氣の弱いことを言ふもんぢやないよ。神様が何かの御都合で、吾々に少時休養を興へて下さつたのかも知れないよ。大方此向うあたりに、大きな大蛇が居つて、俺たち一行を吞まうと待ち構へてをるのを、大慈大悲の神様が助ける爲に、ワザに足が立たないようにして下さつたのか知れぬ。何事も善意に解釋

し、神直日大直日に見直し聞直し、何事が出て来ても、神様の恵を感謝し、災に會うても神を忘れず、喜びに會うても神を忘れぬ様に、誠一つを立てぬきさへすれば、神様が助けて下さるに違ひない。サア是から神言を奏上し、病氣平癒の祈願をせうぢやないか」

房公 「それもさうだ。併し黒姫さんが、一人先へ行つたようだが、其大蛇に吞まれるよ
うなことはあるまいかな。俺はそれが心配でならないワ。何程憎いことをいふ婆ア
さんでも、ヤツバリ可哀相なからな」

房公 「それが人間の眞心だよ。俺だつて、あ、喧しく、黒姫さんを捉へてからかつては
るるものゝ、はる／＼と夫の後を尋ねて、こん所までやつて来る女と云ふものは、
滅多にあるものぢやない。實に女房としては尊い志だ。俺はモウ黒姫のあの心

に、實の所は感服してゐるのだ。さうぞ途中に災のない様、怪我のない様に先づ第一に御祈願し、其次に自分たちの病氣の平癒を御祈りすることにせうかい」

芳公「ヤツバリお前もそう思ふか、それは有難い、さうしても人間の性は善だな」

房公「そこが人間の萬物に靈長たる所以だ。神心だ。サア斯うして腰は立たないが、其外は何でもないのだから、まだしも神様の御惠だ。先づ感謝の詞を捧げて、次に祈願をすることにせう」

と云ひ乍ら、二人は天津祝詞を奏上し了り、靜かに祈願をこらし始めた。

房公「あ、天地を造り固め、萬物を愛育し玉うたる、宇宙の大元靈たる大國治立大尊様を始め奉り、天津神、國津神、八百萬神々様、私はあなた方の尊き御威光に、深きあつき御惠に依りまして、此尊い地の上に生れさして頂き、何不自由なく、尊き

日を送りして頂きました。さうして知らずくに重々の罪科を重ね、人間としての天職を全う致さず、不都合なる吾々をも御咎め玉はず、いたわり助けて、此世を安く楽しく送らせ玉ふ、廣きあつき御恩寵を有難く感謝致します。……此度三五教の宣傳使、黒姫様の御伴を致しまして、萬里の海洋を渡り、恙なく此筑紫の島に渡らして頂き、此處迄無事に神様の懐に抱かれて登つて参りました。乍併、如何なる神様の御攝理にや、吾々兩人は此木蔭に息を休めますると共に、不思議にも腰が立たなくなつて了りました。これと云ふのも、全く吾々の重々の罪が酬うて來たので御座いませう。神様の廣大無邊の大御心を、吾々として計り知ることは到底出來ませぬが、乍併、神様は吾々人間をさこそ迄も愛し玉ふ尊き父母で御座いまする以上、何か吾々に對して手あつき御保護の爲に斯の如く吾が身をお縛り下さつたこと

「有難く感謝致します。つきましては黒姫様は一足先に御立腹遊ばして、此坂路を登られました。何卒途中に於て、悩み災の起りませず、ごうぞ恙なく火の國の都へお着きになります様、特別の御恩寵を與へ玉はんことを懇願致します。又吾々兩人は如何なる深き罪科が御座いませうとも、大慈大悲の大御心に見直し聞直し、宣り直し下さいます様、何卒一時も早く、此身体に自由を御與へ下さいます様、慎み敬ひ祈り上げ奉りまする、あ、惟神靈幸倍坐世」

と合掌し、感謝の涙をハラ／＼と流してゐる。何程祈つても、如何したものか、二人の身体はビクともせない。

日は追々西山に傾き、一天俄に黒雲起り、礫のやうな雨ハラ／＼とマバラに降り来る。雷鳴が暴風雨が將た地震の勃發か、何とも云へぬ凄慘の氣が四面を包むのであ

つた。

二人は撓まず屈せず、一生懸命に……三五教を守り玉ふ皇大神、吾等兩人を始め、黒姫の身邊を守らせ玉へ……と主一無適に祈願をこらしてゐる。山の老木も打倒れん計りの強風、忽ち吹き來り、巨石を木の葉の如く四方に飛ばせ、木を倒し、枝を裂き其物音の凄じさ、何に譬へんものも泣く計りであつた。

此時何處よりともなく風のまに／＼、宣傳歌が聞えて來た。

「神が表に現はれて 善と惡とを立別ける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ 三五教の宣傳使

吾れは玉治別神

筑紫の島に渡りたる

棚なし舟に身を任せ

イソの館を立出で、

ヨルダン河に棹さして

いよ／＼茲に来て見れば

けに凄じき光景ぞ

誠の道の宣傳使

朝日は照る共曇る共

假令大地は沈む共

三五教の黒姫が

高山彦を尋ねんじ

渡り来ますと聞きしより

メソポタミヤを打わたり

フサの海をば横断し

思ひもよらぬ山嵐

さはさり乍ら吾々は

如何なる事も恐れむや

月は盈つ共虧くる共

岩石雨をふらす共

筑紫ヶ岳はさくる共

玉治別の眞心に

天が下なる人草の

助けてゆかん吾心

神の御霊の幸はひて

純世の姫の神柱

吾れは是より火の國の

暗路に迷ふ戀雲を

誠の魂を光らせて

四尾の山の山麓に

神に任せし此身体

如何なる風もおし鎮め

百の災吹き拂ひ

あゝ、惟神々々

國魂神と現れませる

吾れに力を添へ玉へ

都に出で、黒姫が

伊吹拂に拂ひのけ

自凝島の中心地

大宮柱太知りて

鎮まりませる神の前

導き歸り助けなむ

神の御靈の幸ありて

此山嵐速かに

鎮め玉へば玉治別の

教司は逸早く

三五教の黒姫に

出會ひて神の御詞を

一日も早く傳へなむ

あ、惟神々々

御靈幸はひまませよ

と歌ふ聲が二人の耳に響いて來た。

房公

「オイ芳公、あの宣傳歌を聞いたか、さうやら玉治別の宣傳使が間近く見わたらし

いぞ、神様は有難いもんだなア。黒姫様にすてられた吾々兩人は、脛腰立たず、苦

み悶わてる矢先、レコード破りの暴風雨に出會し、神様の御守りは信じ乍らも、戦

々競々として、如何なることか、全く吾が身を案じて居たが、神様の御恵といふも

のは實に尊いものだ。神徳高き玉治別命様にこんな所でお目にか、らうとは、神

ならぬ身の知らなかつた。あ、有難い……神様、早速御神徳を吾々兩人の目の前に

下し賜はりました。何とも御禮の詞が御座りませぬ」

と涙と共に感謝する。芳公もはなを噉りしやくり泣きし乍ら、兩手を合せ感謝の意を

表してゐる。宣傳歌の聲がヒタリと止まつたと思へば、今迄山岳も吹き散れよと計り

荒れ狂うてゐた暴風雨も、拭ふが如く拂拭され、空には雲の綻びより青雲の肌をチラ

／＼と現はすやうになつて來た。雲の帳をあけて、天津日は漸く二人の頭上を斜に

照らし始めた。

芳公

「神様、有難う御座います。重ね／＼の御恵み、さうぞ今の宣傳歌の主に一目會は

して下さいませ、御願ひで御座います」

と両手を合せ、又もや祈願に耽つてゐる。不思議や二人の腰は知らぬ間に、自由が利くやうになつてゐた。

房公「あゝ有難い、足が立つた、腰が直つた。オイ芳公、お前は如何だ。チと立つて見よ、俺は此通りだ」

と四股ふみならし、嬉しげに踊り狂ふ。芳公も案じくソウと腰を上げてみた。

芳公「ヤア俺もいつの間にか、神様に直して貰つた、あゝ有難し勿体なし、……サア房公、是からあの宣傳歌の聲のした方を捜してみようぢやないか」

房公「どうも不思議だなア。つい間近に聞けた宣傳歌の聲、斯うして登つて来た坂路を遠く見はらしてみても、人らしい影は見えない。乍併あの聲は此坂の下から聞け

て来た様だ。不思議なことがあるものだなア。確に吾れは玉治別神と謳はれた様に聞けたがなア」

芳公「確に俺もそう聞いた。ヒョツとしたら、あの宣傳使が最前の蜂の巢の下で、休息され、あの猛烈な青蜂に目でもさゝれて、苦んで御座るのだあるまいかな」

房公「ヨモヤそんなヘマなことはなざる氣遣ひもあるまい、又あれ丈神力のある宣傳使のことだから、蜂の布も大蛇のヒレも持つて御座るに違ない。そんな取越苦勞はせなくてもよからうぞよ」

芳公「そうだらうかなア。そんなら、これからポツ／＼此坂を登ること、せう。黒姫様も最前の暴風雨で、さぞお困りだらうから、一つ追つついて御慰問を申上げねばならまいぞ。玉治別の宣傳使も、或は此坂の上に御座るのかも分らない。風の吹きま

はしやら、木罫こびせの反響はんきやうで、下したの方ほうから聲こゑがしたやうに聞きいたのだらうも知しれぬ。サ
ア行ゆかう」

と言いひ乍はら、兩人りふじんは金剛杖こんがうづゑを力ちからに急坂きふはんを又またもや登のぼり行ゆく。惟神かんながら靈幸たまぢ倍坐はへま世せ。

(大正一一、九、一二、舊七、二二、松村眞澄録)

第二章 有情無情 (二六九)

第九章 玉の黒点（九五〇）

筑紫ヶ岳の山脈の中心、高山峠の頂上に四五人の男、車座になつて何事か囁き乍ら、白黒の石を砂の上に並べ、烏鷺を争うてゐる。

甲 「どうも斯うも此黒がしぶどうて、邪魔になつて仕方がない。此奴一つ殺して了ふと後は大勝利になるんだがなア」

乙 「馬鹿言へ、此世の中は苦勞（黒）が肝腎だ。苦勞なしに物事が成就すると思ふか」
甲 「すべての汚濁や曇りや、塵芥を除き去つた純白の此石は、丸で神様の御霊の様なものだ。能く見よ、中迄水晶の様に透き通つてゐるぢやないか。俺の爺は昔日の出神様が火の國へ御出でになる時、御案内申した御禮として、水晶玉を下さつたが、

今に俺ん所の家寶として、大切に保存してあるが、其水晶玉の前に行つて、何でも御尋ねすると、宇宙の森羅万象がスツカリ映るのだ。それに此頃は如何したものか二三日前から水晶玉の一部に黒點が出来よつて、非常に見つともなくなり、九分九厘と云ふ所迄は何事も判然と分らして貰へるが、其一厘の黒點の爲に遺憾乍ら、十分の判断がつかなくなつて了つたのだ。それだから黒は面白くない、殺して了へよ云ふのだよ。黒い奴に碌な者があるかい、三五教の黒姫とかいふ眞黒けの婆アが、何でも此筑紫島へ渡つて来よつたに違ないのだ。そうでなければ、國玉とも譬ふべき水晶玉に黒點が現はれる筈がない。それで今茲でお前達と白黒の勝負を闘はしたのも、一つは水晶玉が如何なるか、黒姫が果して此國の邪魔をするか……と云ふ事を卜なつたのだ。さうしても此黒い石が邪魔になつて仕方がないワイ」

丙 「此黒い石を殺すと云つたつて、元から礦物だ。動植物と違つて、生命を有る譯にも行かず、斬り倒して枯らす譯にも行かんぢやないか」

甲 「それよりも、建野ヶ原の神館の建能姫さんは、此頃立派な婿様が出来たぢやないか何でも建國別とか云ふ立派な宣傳使だと聞いたがなア」

丙 「建能姫さんは建日の岩窟に館を構へて御座つた建日別命の一人娘で、永らく神様の道を宣傳してゐられたが、餘り男が澤山に参拜して酒に酔うた揚句、其美貌に現をぬかし、何だかんだと言ひ寄つて、蒼蠅くて堪まらないから、獨身主義を執つて居られた建能姫さんも、到當決心なさつて、建野ヶ原へ宿替をなされたのだよ」

乙 「貴様も建能姫に眩鐵を喰はされた一人だらう……否一人でなくて猥褻行爲犯人だらう、アハ、ハ、ハ」

丙「馬鹿を言ふない。建能姫さんは體中から何とも云へぬ水晶玉の様な光が絶えず放射してゐるのだから、到底吾々凡夫がお側へでも寄りつかうものなら、夫れこそ目が潰れて了うワ、何でも色の黒い、鼻の曲つた男が、水晶玉を懐に入れて行きよつてなア、建能姫さんに面會し……これは我家に傳はる重寶で御座います、これを貴女に献上致します……さしたり顔に差出した所、建能姫様は厭相な顔付し乍ら、ソツと手に受取り、クル／＼と轉がして見て……ハハハ此水晶玉には戀慕といふ執着心の黒點が現はれてゐるから、折角乍ら御返し申します……と無下につき返された馬鹿者がある云ふ事だ。それで其男は玉の黒點が氣になつて堪らず、何うぞして此黒點が除れたならば、建能姫様に献り、歡心を買うて、ソツと婿にならうと云ふ野心があるのだ。其野心が除れん間は、何程日の出神から頂いた水晶玉でも其黒

點は除れはせないよ」

と言ひ乍ら、稍冷笑氣味に甲の顔をグツと見上げる。甲は電氣にでも打たれた様に胸を蘇かせ乍ら、顔を赤らめて沈黙に入る。

丁「それで玉公が黒姫がさうの、斯うのと言つて居やがるんだな。白石が負て、黒石が勝た時、掌中の玉を取られた様な顔色をしようと思ふたら、そんな深遠な計略があつたのか、アハ、ハ、ハ……忍ぶれど色に出にけり我戀は、物や思ふと人の問ふ迄……とか云ふ百人一首の歌そつくりだな」

乙「オイ玉公、そんな曇りのある水晶玉は、貴様ん所の不吉だから、い、加減に川へでも投げ込んで了つたら如何だ。災の來る前にはキツト寶の表に黒い影がさす云ふ事だ。人間の面体だつて、凶事の來る前は、さういふことなしに、黒ずんだ斑點が現

はれるんだからなア」

甲は力無けに、

玉公「捨てよと云つた所で、爺の言ひ付け、こんな事があつても、此玉は我家を出す事は出来ぬ。それ共尊き神様が現はれなかつたならば献上して良いが、決して人に賣つたり、譲つたり、捨てちやならんぞ、死んだ爺の遺言だから、俺の自由にはならないのだ。建能姫様が御受取り下さらねば、もう仕方がない、此玉の黒點が除れる迄、御祈願をこらして身を慎むより、俺には方法はないのだ。併し俺の考へでは如何しても此筑紫島へ黒姫がやつて來たに違ない、本當に困つた奴が來たものだ。日の出神様のやうな方がお出でになれば、此玉は益々光り輝くのだが、黒點が次第々々に擴がつて、此頃では半透明に曇つて了つた。あの玉の黒點から考へて見ると

さうしても黒姫と云ふ奴、今日此頃は此峠のあたりへ近付いて來る象徴が見ゆる。それで實の所はお前達を無花果取りにかこつけて、こゝ迄誘うて來たのだ。其序に白黒石の勝負をやつて見たのだ。こりや如何しても黒が障つてゐる。黒姫を……否黒石を叩き割つて了はねば、此國はサツパリ駄目だよ。水晶玉の筑紫の國がサツパリ泥水になつちや堪らない。國魂の神様は此世を水晶に御澄し遊ばす純世姫命様だ。俺ん所の秘藏の水晶玉は、言はゞ純世姫様の國玉だ。さうかして黒名名のつく者は亡ぼして了はなくちや、國家の一大事だよ」

丁「そんな小ほけな水晶玉に、廣大無邊のアフリカの國魂神様が憑つて御座るとは、チと理窟が合んぢやないか」

玉公「馬鹿云ふな。伸縮自在の活動を遊ばすが、所謂神様の御高德だ。至大無匹、至

小無外、無遠近、無廣狹、無明暗、過去、現在、未來を只一塊の水晶玉に集めて、俺達が掌で玉を轉がす様に、自由自在になさるのが神様だ。其神様の御靈があの方に曇りかけたのだから、吾々筑紫島の人間はウカ／＼しては居られないのだ。お前達は直に建能姫様に俺が戀慕をして居る様に、妙な所へ凡夫心を發揮しよるが、そんな陽氣な事ぢやない。今に地異天變が何時突發するか分つたものぢやないぞ。最前の暴風雨だつて、茲二十年や三十年、聞いた事のない荒れ方ぢやないか。大きな岩が木の葉の如くドン／＼と降つて来る、大木は根から倒れる、木の枝は裂ける無花果の様な雨が降る。よく考へて見よ。こりや決して只事ぢやないぞ」

斯く話す所へ、蓑笠草鞋脚絆に金剛杖の輕き扮装にて、コツン／＼と、坂路を叩き乍ら登つて来る一人の中婆アがあつた。此れは言はずと知れた三五教の黒姫である。

黒姫は漸く頂上に登り詰め、ヤツと一安心したもの、如く、左の手に金剛杖を固く握り、體をグツと支へ、右の手の拳を固めて、腰を三つ四つ打ち叩き、

黒姫「アアア」

と云ひ乍ら、グツと脊伸びをした途端に、五人の男が車座になつて、何か囁いてゐるのに目がつき、

黒姫「モシ／＼そこに御座るお若い御方、一寸物をお尋ね致しますが、火の國には高山彦といふ尊い宣傳使が御見ねになつてをると云ふことをお聞きぢや御座いませぬか？」

乙「何處の婆アさんか知らぬが、此山路を大膽至極にも一人旅とは如何したものだ。高山彦様の身の上を尋ねて、お前は何とする考へだ」

丙 「オイ虎公、餘りぞんざいな物言ひをしちやならんよ。高山彦様のお母アさんかも知れないからなア」

虎公 「モシ／＼貴方は御子息の所在を尋ねて、はる／＼此處迄、御出でになつたのですか」

黒姫 「イエ／＼私 は高山彦の妻で御座います。夫の後を慕うて此處迄参りました。高山彦さんは御無事でゐらつしやいますかな」

虎公 「御無事も御無事、夫は／＼大變な勢ひだ。乍併、お前さんが高山彦様の女房とはチツと合點の往かぬ話だ。愛子姫様といふ立派な奥様が御座るのに、お前の様な腰の曲りかけた婆アさんを、女房にお持ちなさるとは、チツと可怪しいぢやないか。ソリヤ大方人違だらう。俺又そんな年老りが男の後を慕うて來ると云ふ事は、昔か

ら聞いた事がない、息子の間違ぢやないかな」

黒姫 「私も息子があつただのだけれど、若い時に世間の外聞が悪いと云つて、四辻に捨て人に拾はしたのだ。其天罰で夫には別れる、我兒の行方は知れず、年は追々寄つて來る、自分の子はなし、力にするのは神様と高山彦の夫許りだ。其高山彦さんに若い女房があるとは、嘘ぢや御座いますまいかなア」

虎公 「決して嘘は言ひませぬ。一言でも嘘を言はうものなら、國魂神様の罰が當つて、忽ち口が歪んで了ひます。此熊襲の國の人間に口が歪んだ奴の多いのは、皆嘘を言つて神罰を受けた奴許りですよ、なア新公」

新公 「オウそうとち／＼、恐ろしいて、嘘のウの字も言はれたもんぢやない」

黒姫 「あ、そうですか。あ、折角此處迄長の海山を越へ、やつて來た黒姫の心も知

らずに、高山さんとした事が、若い女を女房に有つては、餘り没義道だ。チツとは私の心も推量してくれても能かりさうなものだのに。あ、如何せうかな。進みもならず、退きもならず、困つたことになつて来たワイ』

と涙をハラ／＼と流し、立つた儘、歎きに沈んで居る。

玉公「コレ／＼お婆アさん、お前さんは今、黒姫だと言ひましたねい」

黒姫「ハイ、火の國の都にまします高山彦の宣傳使の眞の女房で御座います」

玉公「ハテ困つた事が出来て来た。私は此黒姫を亡ぼしてやらねば、此國が泥海になつて了うと、水晶玉の知らせに依つて此處迄やつて来て待つてゐたのだが、御神徳高き高山彦様の奥さんであれば、如何することも出来ない。高山彦様は筑紫の島の生神様、親様と、國民全体が尊敬して居る立派な御方、其奥様を虐げる譯には行か

ない。そうすると黒姫さん、貴女は高山彦様の本當の奥様に間違ありませんか」

黒姫「決して間違はありません、愛子姫と云ふのは、つまり高山彦さんのお妾でせう。

一夫一婦の掟の嚴しい三五教の宣傳使が、二人も本妻を持つ道理は有ますまい」

玉公「ハテ合點の行かぬ事だ。あれ丈立派な高山彦様が、妾を御持ちなさるとは、何たる矛盾であらう。何程戀は思案の外といつても、コリヤ又餘りの脱線振だ。……モシ／＼黒姫さん、貴女は一旦離縁されたのぢやありませんか。斯う云ふと失禮だがあんな立派な宣傳使が、お前さんの様な黒い御方と夫婦にならつしやるのは、丁度月と籠、鶯と鳥が結婚した様な者だから、お前さん自凝島とやらで、三行半を貰はしやつたのぢやありませんか。そうでないと、如何しても高山彦さんの神格に照らし、合點の行かぬ節が澤山あるのだ」

虎公「モシ黒姫さん、最前お前さんは一人の子を捨てたと仰有つたが、其子は今生で居つたら幾つ位になつてゐられますかな」

黒姫「ハイ、今から三十五年前の事、今居つたならば三十五才の血氣盛りの立派な男になつて居るだらう。若い時は親の許さぬ男の子を拵へて、世間に外聞が悪いと思ひ無慘にも四辻へ捨てたのだが、今になつて考へて見れば實に残念なことを致しました」

と今更の如く涙をハラ／＼と流し憂ひに沈む。

虎公「建野ヶ原の神館の建能姫様の御養子に見わたしたのは、今年卅五才、建國別といふ立派な宣傳使だ。其お方も話に依れば、水兒の時に捨兒をしられ、今に兩親の行方が知れんので、三五教の神様を信じ、一日も早く臈の父母に會はして下さいといつて

一心不亂に信仰を遊ばし、遂には尊い宣傳使にお成りなされたといふ事です。今から丁度一年前だつた。火の國の館の高山彦様が御媒酌で建能姫様の御養子婿になられ、夫婦睦まじく、御神徳は日に夜に高く、それは／＼大變な勢で御座いますよ。よもやお前さんの捨てた御子さんではあろまいかなア」

黒姫「何、建國別の宣傳使が捨兒だつたとなア。さうして其お年が卅五才、ハテ合點の往かぬ事だなア」

(大正一一、九、一三、卷七、二二、松村眞澄録)

第一〇章 空

縁 (九五二)

建野ヶ原の神窟は、風景よき小丘の上に小蔭張として新しく建てられて居る。千年の老樹、鬱蒼として境内を包み、實に神々しき地點である。前は激潭飛沫を飛ばす深谷川が横きつて居る。朝から晩迄信徒の參集する者踵を接し、神の神徳は四方に輝き渡つて居た。

館の奥の間には建國別の宣傳使脇息に凭れ乍ら深き吐息をついて居る。襖をそつと引き開け、湯を盆にもつて淑やかに入つて來た絶世の美人は建能姫であつた。

建能姫「我夫様、お早う御座います。お湯が沸きました、どうぞ一つ召し上がり下さいませ」

と差出す。建能姫の聲にも氣がつかぬと見ね、目を塞ぎ默念として何か冥想に耽つて居る。建能姫は少しく聲を高め

建能姫「もしく我夫様、お湯が沸きました、召し上がり下さいませ」

此聲にハツと氣が付いたやうな面持にて

建國別「ヤア其方は建能姫、お湯が沸きましたかな、有難う頂戴致しませう」

建能姫「我夫様、貴方は妾の家にお越し下さいましたから、恰度今日で満一年になります。然るに唯の一度も妾に對し御機嫌のよいお顔を見せて下さつた事は御座いませぬ。妾も初の中は不束なもの故お氣に召さぬかと存じ色々氣を揉みましたが、貴方様はいつも妾を可愛がつて下さいますので合點が行かず、何か深い秘密がお有りなさるのであらうと、常々に濟まぬ事ながら御様子伺つて居りました。然る處

或夜のお寢言に……父上母上に一目遇ひ度い……と仰有つた事が妾の耳に今に残つて居ります。何卒女房の妾に何の遠慮も入りませぬから、ハツキリと仰有つて下さいませ」

と恐る／＼問ひかけた。

建國別「女房の其方に隠して居つて誠に濟まなかつた。水臭い夫と恨んで下さいますな貴女は由緒ある建日別命様の御息女、此建國別は父母兩親の所在も分らず、況して素性は如何なるものか些とも見當が取れませぬ。今は建日別命様の跡をつぎ、建國別と云ふ立派な名を頂き、尊き神様にお仕へをして居りますが、私の幼時は金太郎と云つて姓も知れず、人に拾はれ他人の情によつて、漸く三十五の今日迄成人して來ました。私の父母はもう今頃は此世に生て居られるか、或は彼世の人に

なつて居られるか、何だか知らぬが、兩親に遇ひ度い／＼云ふ執着心がムク／＼と腹の底より起つて來て、いつも知らず／＼顔がふくれ、不機嫌な顔をお前様に見せました。何卒氣を悪くして下さいませ」

建能姫「勿体ない何を仰せられます。今日は夫の我家に入らせられてより滿一年の吉日、何卒機嫌をお直し下さつて、夫婦揃ふて神様にお禮を申上げ、心祝ひに皆の役員信者に御神酒でも饗應申しませうか、神様のお蔭で貴方も御兩親にキツトお遇ひなさる事が何れは御座いませう。何卒その様に落膽せず、潔く暮して下さいませ」

建國別「ハイ有難う、そんなら今日は機嫌よう神様にお禮を致しませう。そうして役員信者に御神酒を頂かしませう」

建能姫は嬉し氣に、いそぐとして酒宴の用意を役員在建彦に命すべく此場を下つて仕舞つた。

後に建國別は双手を組み、兩親の身の上及び建能姫の親切なる言葉に感謝の涙止め難く、袷服の袖に時ならぬ夕立の雨を降らして居る。建能姫は襖を靜に開き叮嚀に兩手をつき、言葉靜に

建能姫「我夫様、建彦に今日の祝宴は一切命じて置きました。サア、妾と二人これから神前へお禮に上りませう」

建國別は建能姫のやさしき言葉に満足の面を照しながら神殿深く進み入り、感謝祈願の祝詞を奏上するのであつた。玉を轉す如き建能姫の聲、音吐朗々たる建國別の祝詞の聲と琴瑟相調和して、得も云はれぬ風韻が境内に限なく響き渡り、神々しき光

景が溢れてゐる。

建彦以下の幹部役員を初め、數多の老若男女は早朝より詰めかけ、今日の祝宴に列すべく和氣霽々として、境内の各所に三々五々群をなし、建國別夫婦の高徳を口々に讚歎して居る。上下一致相和樂して恰も天國淨土の趣が館の内外に十二分に溢れて居る。かゝる處へ表門を叩いて入り來る男女二人の道者があつた。

女「もしく、一寸此門を開けて下さいませぬか。妾は自轉倒島より參りました黒姫と申す者で御座います。火の國の高山彦の宣傳使が女房だと仰有つて下さらば、建國別様はキツとお遇ひ下さるでせうから……」

門番の幾公は高山彦の女房と云ふ聲に驚き慌々表門をサツと開いた。數多の參詣者の出入する門は横の方にある。此門は唯建國別個人としての住宅の門であつた。黒姫

は

「御注進」

と云ひながら此門内に慌しく進み入る。幾公は一人の男の顔を見て

幾公「ア、お前は玉さんぢやないか。さうして又このお方の御案内をして来たのだ」

玉公「チツと合點の行かぬ事があるのだ。ひよつとしたら建國別様の此方はお母アさんかも知れないよ。夫で兎も角も御案内申したのだ」

と、耳の邊に目を寄せ他聞を憚るやうな面持にて呟いて居る。

幾公「それや大變だ。今日は建國別様のお越し遊ばしてから滿一年の祝宴が開かれてる處だ。こんな芽出度い場所へお母さんがお越になるとは益々もつて芽出度い事だ。オイ玉さんお前何卒暫く俺に代つて門番をし居て呉れ。俺はこれから建國別様にこ

の吉報を注進して来るから……」

と云ひ捨て黒姫に追ひつき行く。

幾公「もしく建國別のお母さん、ポツく来て下さい。私が先に御主人に御注進申上げ、お迎へに参ります。何卒この中門の傍に御苦勞ながら暫く立つて待つて居て下さいませ」

と早くも慌者の幾公は、建國別の母親と固く信じて仕舞ひ、不遠慮に奥の間さして慌たどしくかけ込んだ。

奥の間には建國別夫婦、向ひ合ひとなつて祝の酒を汲み交はして居る。

建能姫「我夫様、今日位氣の何となく嬉しい時は御座いませぬなア。それについても貴方の御両親様が此席にお出になり、親子夫婦が斯うして睦じう直會のお神酒を頂く

のならば、何程嬉しい事で御座いませう」

建國別

「あ、さうですなア。併し私は今神前に御祈願の最中、フツと妙な考へが起りました。私の両親はキツト此世に生きて居て神様のために立派な宣傳使となり、活動して居られるやうな感が致しました。そうして今日は何となしに両親に遇ふ手筈が出来たるやうな気分が浮いて来て、酒の味も一層よくなりました」

建能姫

「夫はく、何よりも嬉しい事で御座ります。キツト神様のお引き合せて誠さへ積んで居れば、御両親様に御對面が出来ませう。妾も一昨年両親に別れ力と頼むは唯我脊の命ばかり、そこへ御両親様がお見ねにならうものなら、これ程嬉しい事で御座いませう。妾はキツト生の父母と思ひ、力限り孝養を盡しますから何卒御安心下さいませ」

と涙ぐむ。建國別は

建國「ハイ有難う」

と云つたきり感謝の涙に咽び、無言の儘俯向いて居る。

その處へ足音高く慌たゞしく入り来るは門番の幾公であつた。ガラリと襖を無雑作に引きあげ、片膝を立てたま、手をついてハア／＼と息をはづませ

幾公

「もしく御主人様、大變な事が出来ました。天が地となり、地が天になるやうな突發事件で御座いますよ」

建國別は稍氣色ばみ、忽ち立膝となり

建國

「お前は門番の幾公、大變事が突發したとは何事だ。早く云つて呉れないか」

幾公

「ハイ、大變も大變地異天變、手の舞ひ足の踏む所を知らずと云ふ喜びが降つて來

ました。お目出度う御座います。御夫婦様お喜びなさいませ。あ、嬉しいく目出度いくおめでたい」

と手を打つて立ち上り、キリキリと舞ふて見せた。夫婦は合點往かず、ジツと幾公の亂舞を見詰めて居る。

幾公

「これはく御主人様、餘り嬉しうて肝腎の申上げる事を忘れました。目出度い時には目出度事が重なるものですなア。貴方のお母さんが、建國別の館は此處か、一べん遇ひたいと仰有つて、今、村の玉公さんの案内でお見ねになりました。中門の口に待つて居られますから、何卒御夫婦様機嫌克くお出迎へ下さいませ。嗚お母さんもお喜びで御座いませう」

建國別は

「ハテナア」

と云つたより又手を打ち又もや思案こせじ。幾公は焦慮どうに

一　これは　たいに主人も、ハテナも何もあつたものですが。愚圖々々して居られま
すど、お母さんが怒つて歸られたら、それこそつまりませぬ。喜びも一所に歸つて
仕舞ひます。何卒早くお出迎ひなすつて下さいませ。中門の口に立つて居られます
から……」

建能「御主人様、兎も角も貴方は此處に居て下さいませ。妾が實否を檢べて参ります」

建國「御苦勞だが貴女往つて来て下さい、假令眞偽は分らなくとも御叮嚀に奥へお通し
申しゆつくりとお話を承はりませう。可成人の耳に入らないやうにして下さい」

建能「ハイ承知致しました。それなら妾がお迎ひに参ります……これ幾公さんや、お前

此事は眞偽の分る迄誰人にも云つてはなりませんよ」

幾公は頭を掻きながら

幾公「ハイ併し乍ら、あんまり嬉しいので四五人の連中に喋つて了ひました。もう今頃は建彦の幹部さんにも耳に入り、やがてお祝にテク／＼詰めかけるでせう。今更口留する譯にも往きませず、さうしませうかなア」

建能

「何とまあ氣の早い男だなア、萬一人違ひで、眞實のお母さんで無かつた時はお前さうなさる積りかへ」

幾公

「眞實でも嘘でもお母さんはお母さんですよ。此幾公だつてお母さんが無いのだもの、烏がカア／＼云ふ聲を聞いても懐かしくなるのだから、嘘でも眞實でも構ひませぬ。お母さん聞いてこれがさうしてヂツとして居れませうか」

建國「ハ、困つた男だなア。これ幾公さん、お湯を一つ汲んでおくれ」

幾公「お湯を汲んでお母さんに上げるのですか。餘り門口では失禮ぢやありませんか。」

折角尋ねてお出になつたお母さんに、乞食か何ぞのやうに門口でお湯を上げるなんて些と失禮ぢや御座いませんか」

建國

「分らぬ男だなア。お湯を私に汲んでくれと云ふのだよ」

幾公

「一寸お待ちなさいませ。親より先へお湯を頂くと云ふ、そんな不道理な事がありますか。今迄は御両親の行衛が分らないものだから、此家の大將で貴方が一番先にお湯なり御飯なりお食ひ遊ばしたのだが、もう今日となつては長上をさし置いて貴方が先へお茶を飲むと云ふ道理はありますまい。そんな事で三五教の宣傳使が勤まりますか」

建國「ヤア、長々とお前のお説教で私も感心した。そんならお湯を頂く事だけは暫く見

建國「これは三五歳の宣傳使建國別命様、物の道理が能く分ります哩。さうだから此幾公も貴方の抱擁力の偉大なるに平素から感服して、門番を甘んじて勤めて居るので。これから御蒙りまして、お母さんをお迎ひに参つて來ます……サア建能姫様早くお出でなさいませ。お母様が門の外で痺を切らして待つて被居いますよ」

建能「左様ならば我夫様、一寸お迎へに行つて來ます。幾公さん、あんまり喋らないやうにして下さいや」

幾公「ハイ、委辭承矢形しました。サア参りませ」

建能姫をつき出すやうに促しながら中門のそば迄やつて來た。幾公は中門を無雜作

にハツと開き

幾公「お母さん、長らくお待ち致しました。サア何卒お入り下さいませ。これは建能姫と云ふ女房で御座います。何卒實の我子のやうに可愛がつてやつて下さいませ。

建能姫も一寸聞いて居ましたら、建國別様の御兩親が見わたら、生の父母のやうに思ふて孝養を盡すと云ふてくれました。何卒氣兼は入らぬから我子の家へ歸つたと思ふて、氣樂にお入り下さいませ」

建能「これ、幾さん、お前それは何を云ふのですか」

幾公「ハイ、私は御主人の代りに参つたのですから、一寸代辯を致しました。これ建能姫殿、早くお母さんに御挨拶をしいのう」

建能「ホ、、、仕方のない男だなア……もし、旅のお方様、よう此破家をお訪ね

下さいました。内密にお伺ひしたい事が御座いますから、何卒お入り下さいませ」
 黒姫「ハイ有難う御座ります。私も筑紫ヶ岳の高山峠の頂きで、一寸此方の御主人の事を承はり、些し許り心に當る事が御座いまして、火の國の都に参ります途中、此村の玉公さんと云ふお方に案内されてお邪魔を致しました。左様なら遠慮なう通らして頂きませう」

と建能姫に従つて奥に姿をかくす。

幾公「まア何と上流社會の挨拶と云ふものは七面倒臭いものだなア。俺だつたら出遇ひ頭に……ヤアお前は、ヤア、貴方は我夫建國別さんのお母さんであつたか、ヤアお前は嫁御であつたか、思はぬ所で遇ひました。お母さん、嫁女など、手つ取り早く名乗つて了ふのだがなア。まだこれから奥へいつて徳利に詰めた味噌を剔りだ

すやうな辛氣臭い掛合が初まるのであらう、繁文縟禮を忌み簡明を尊ぶ世の中に、サテモく上流の家庭と云ふものは迄も舊套を脱し得ないものと見ゆる哩」

(大正一一、九、一三、舊七、二二、加藤明子録)

瑞 月

松の御代浦安國とさだめんど

三五の神空に輝く

第一章 富士 咲 (九五二)

一方は巍峨たる高山を控へ、前には清流奔る幽谷流れ、一方は大原野を見晴らす絶勝の地點に建てられた建日館の別殿に、主客三人鼎坐してヒソヒソと話に耽つて居る。

建國別「御老体の身を以て、よくもお訪ね下さいました。貴女も矢張り御子息の行衛を尋ねてお廻りになつてゐると云ふ事ですが、何卒其事情を御差支なくば簡単に御明かし下さいませぬか」

黒姫「はい、妾は三五教の黒姫と申す者で御座います。只今は自凝島の錦の宮に仕へて居りまする宣傳使で御座いますが、或る事情の爲に此筑紫の島へ遙々と三人の伴を

連れ、夫の所在を探さん爲に参つたもので御座います。そうした處、高山峠の頂上で五人の若い男が、いろ／＼と話をして居るのを承はれば、建日の館の建國別の宣傳使は本年三十五才、さうして両親の行衛が分らず非常にお探しになつてると云ふ事を聞きましたので、妾も何とはなしに心動き、妾の捨てた子も本年三十五才、よもや其伴ではあるまいかと存じまして、御取込の中をも顧みず御邪魔を致しました」

建國別「貴女の夫と申すのは何と云ふお名で御座いますか」

黒姫「はい、高山彦と申します。此頃火の國の都に於て、三五教の宣傳をやつて御座ると云ふ事を承はりまして、其處へ尋ねに行く道すがらで御座います。そうした處五人の男の話によつて、我子の事を想ひ出し、よもや貴方が、若い時に捨てた子で

はないかと思ひ、失禮をも願みずお尋ねした次第です」

建國別「は、何と仰られまうか。高山彦様が貴女の御主人とは、合點の往かぬ事を承はります。高山彦様は實は私の御師匠様で御座いますが、神素蓋鳴尊の御長女愛子姫様をお娶り遊ばし、今では夫婦睦まじく御神業に奉いされ、神徳四方に輝き渡り、飛つ鳥も落す勢で御座います。如何して又高山彦様が貴女と云ふ正妻があるのに、奥さんを持たれたのでせうか。高山彦様は左様な天則違反な行爲をなさる様なお方では御座いませぬが、何かの間違では御座いませぬかな」

黒姫「自凝島の聖地に於て、一寸の事から夫婦喧嘩を致しまして、夫れを機會に夫の高山彦は妾を振捨て、筑紫の島さかへ行くと云つて出たきり、今に何の便りも御座いませぬ。此島に駆け着いて人々の噂をきけば、貴方の仰せの通り、若い女房を持つ

て暮らして居られるこの事、到底妾の様な婆アが参りましても取會つて下さいますまい。然し折角此處迄参つたのですから、一目なりと會ひ、言ひ度い事も言ひ、先方の出様によつては妾も神の道の官傳使、あとに何も残らぬ様に離縁をして貰ふ考へで御座います。乍併途中に於て貴方の噂を聞き、若しや我子ではあるまいかと思ふにつけ、氣の多い夫よりも自分の腹を痛めた忤に出會ひ、老後をお世話になり度いものだと思ひ、失禮を願みず御伺ひを致しました。然し違ひますれば御許し下さいますか」

建國別「其御子息には何か目印でも御座いますか」

黒姫「はい、赤兒の時で確り分りませぬが、確に背中の真中に白い痣があり、それが富士の山の形に似て居りますので、これは大方富士の山の木花咲耶姫様の御生れ替は